

信 道 者

特 231
116

一
一
一
一



著 郎 二 木 鈴

始



特231
116



大傳道者

一 デ 一 ム

著 郎 三 木 鈴



行 發 社 界 世 曜 日

序

私は敢てムーデーの評傳を書かうとするものではありません。私はたゞ彼を色々な観点から、色々な角度で眺めて見たいのです。そして人々に、彼の裡に働いてゐた能力がキリストのものであつたことを知らしめたいのであります。私はたゞそれだけの意圖しか持ち合せて居りません。

—著者—

—目次—

生涯の概略……………二

彼を育てた宗教と自然……………五

學ぶところは人生……………七

聖書のみ……………一〇

回心……………二二

はじめの聖書の組——傳道……………二五

單純！單純！……………三三

愛の教……………三五

颯爽たる大説教家……………三七

彼の説教について……………三八

彼の身振り……………三九

二

| | | |
|---|----|----|
| 用 | 語 | 三〇 |
| 短 | い | 三〇 |
| 説 | 話 | 三〇 |
| カ | の | 三〇 |
| 秘 | 訣 | 三〇 |
| 彼 | の | 三〇 |
| 謙 | 遜 | 三〇 |
| 華 | かな | 三〇 |
| 尾 | を | 三〇 |
| ひ | か | 三〇 |
| ず | | 三〇 |
| サ | ン | 三〇 |
| キ | ー | 三〇 |
| ミ | の | 三〇 |
| 提 | 携 | 三〇 |
| サ | ン | 三〇 |
| キ | ー | 三〇 |
| の | 發 | 三〇 |
| 發 | 見 | 三〇 |
| サ | ン | 三〇 |
| キ | ー | 三〇 |
| の | 獨 | 三〇 |
| 獨 | 唱 | 三〇 |
| 二 | 人 | 三〇 |
| の | 友 | 三〇 |
| 友 | 情 | 三〇 |
| 偉 | 大 | 三〇 |
| な | る | 三〇 |
| 人 | 間 | 三〇 |
| 彼 | の | 三〇 |
| 健 | 康 | 三〇 |
| 子 | 供 | 三〇 |
| の | 友 | 三〇 |
| 友 | | 三〇 |
| 家 | 庭 | 三〇 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 指 | を | あ | け | て | 三 |
| 博 | 大 | な | 同 | 情 | 三 | |
| 明 | る | い | 哄 | 笑 | 三 | |
| 彼 | の | 關 | 心 | は | 三 | |
| 靈 | 魂 | の | 救 | の | 三 | |
| 救 | の | み | | | 三 | |
| 彼 | の | 終 | 末 | 的 | 三 | |
| 世 | 界 | 觀 | | | 三 | |
| 靈 | 魂 | の | 獵 | 人 | 三 | |
| 傳 | 道 | に | 對 | す | る | |
| 白 | 熱 | | | | 三 | |
| 大 | 統 | 領 | ウ | ィ | ル | |
| ソ | ン | の | 證 | 言 | 三 | |
| 街 | 燈 | の | 下 | に | て | |
| 雨 | 傘 | の | 下 | に | て | |
| 歡 | 喜 | の | 記 | 録 | 三 | |
| 意 | 志 | に | 、 | そ | し | |
| て | 、 | 實 | 行 | に | 三 | |
| ラ | テ | ン | 的 | 三 | | |

● 残されし一つの疑問…………… 九〇

彼の後に來る者(ヘンリー、アーサー、スタントン等)…………… 九三

彼の自叙傳…………… 九七

結語…………… 九八

目次(をばり)

大傳道者ムーデー

生涯の概略

二

ドワイト・ライマン・ムーデー、——前世紀の、あの偉大な傳道者は、西暦千八百三十七年に、マツサチユーセツツのノースフィールドで生れました。

父は、石工をしてゐましたが、ムーデーのごく幼少なときに世を去り、その後は母一人が、そのかよわい、然し健氣な手一つで多くの家族を養つていつたのです。彼の母はまことに、忍耐深い、虔まじやかな、そして自分を犠牲にするこゝを何んとも思はないほどの、立派な婦人でした。

かくてドワイトは母につれられ、日々の生活に追ひやられながら、ニュー・イングランドの田舎の町々を轉々さすらし歩かなければなりません。やがて青年になつた頃、彼はボストンに出ました。そして、いろいろ苦しい生活の戦をつけたのち、彼の叔父に當る人の家業

である靴商賣にやうやく納まりました。彼は商賣についても非常に熱心であり、上手でもありませんでした、そして西暦千八百五十六年のとし、彼はマウント・ヴァーノン・ストリート教會の會員になりましたが、それが彼の傳道のそもそも、若し彼にまつて、靴商賣よりも、神のために勤勞するこゝの方が、はるかに興味のあるものでありました。しかしボストンに云ふ土地が、どうも、しつくりムーデーに合はなかつたものか、彼はやがてシカゴに居を移しました。そして、そこで靴を賣るこゝと、もう一つの大きな仕事——罪人を救ふ傳道を始めました。

西暦千八百六十二年には彼は一人の氣高い婦人と結婚をしました。この結婚こそ彼にまつては恵まれたものでありまして、彼の妻は、やがて凡ての仕事に於て、ムーデーの片腕となりムーデーを支へる力となつたのです。

ムーデーの仕事は、先づ貧しい子供たちの靈魂をつかむこゝでした。それから貧しい人々——最後に貧しい者にも富める者にも救を傳へるこゝでした。彼は着々この順序を踏んで、成功を納めました。

かの南北戦争の間には、彼は軍隊に入りはしなかつたが、盛んに兵士たちの間に傳道をしま

三

した。それから彼は牧師としての任命をうけたことはなかつたけれども、或る時はシカゴに於て一つの教會を牧會したこともありました。そして、それをも、彼獨得の精力でもつて美事に成功をしました。

四

その頃はサンキー氏に會ひました。サンキーを發見したことは、その後の彼の活動にまつては非常な仕合せでした。この點に於て彼は伯樂の眼を具へてゐた云つていゝでしょう。實際彼の焔のやうな辯舌も、サンキーの人のこゝろを和ごめるやうな、やさしく、情味にみちた聲なくしては、充分の効果を現すことが出来なかつたでありませうから。

その後彼は二度計りヨーロッパを訪れましたが、これらの短い旅行中に、更に更に偉大なる活動に對する白熱が湧き起つたのであります。

かくて、西曆千八百七十三年、サンキーは、二年に亘つて英國を遍歴して各所に大集會を催し、傳道者として世界的名聲を博するに到つたのであります。この壯舉を終へて己が祖國に立ち歸つた後、彼は同じやうな集會を各所にひらいて、素派らしい成功を納めました。晩年は舌鋒をやゝ納めて、ひたすら、惱める人々の爲の善き相談相手となり、よき傳道師

養成者となつて、遂に西曆千八百九十九年、ノースフィールドの自邸に於て、しづかに天に召されました。……

以上が彼の一生の至極手短な物語であります。

結局、彼の生涯は、カナの婚筵の様でした。年ふるにつれて、人生の滋味を味ひ、祝福をまじ加へられました。嘗てフランシス・ウイラーは己が生涯に就いて

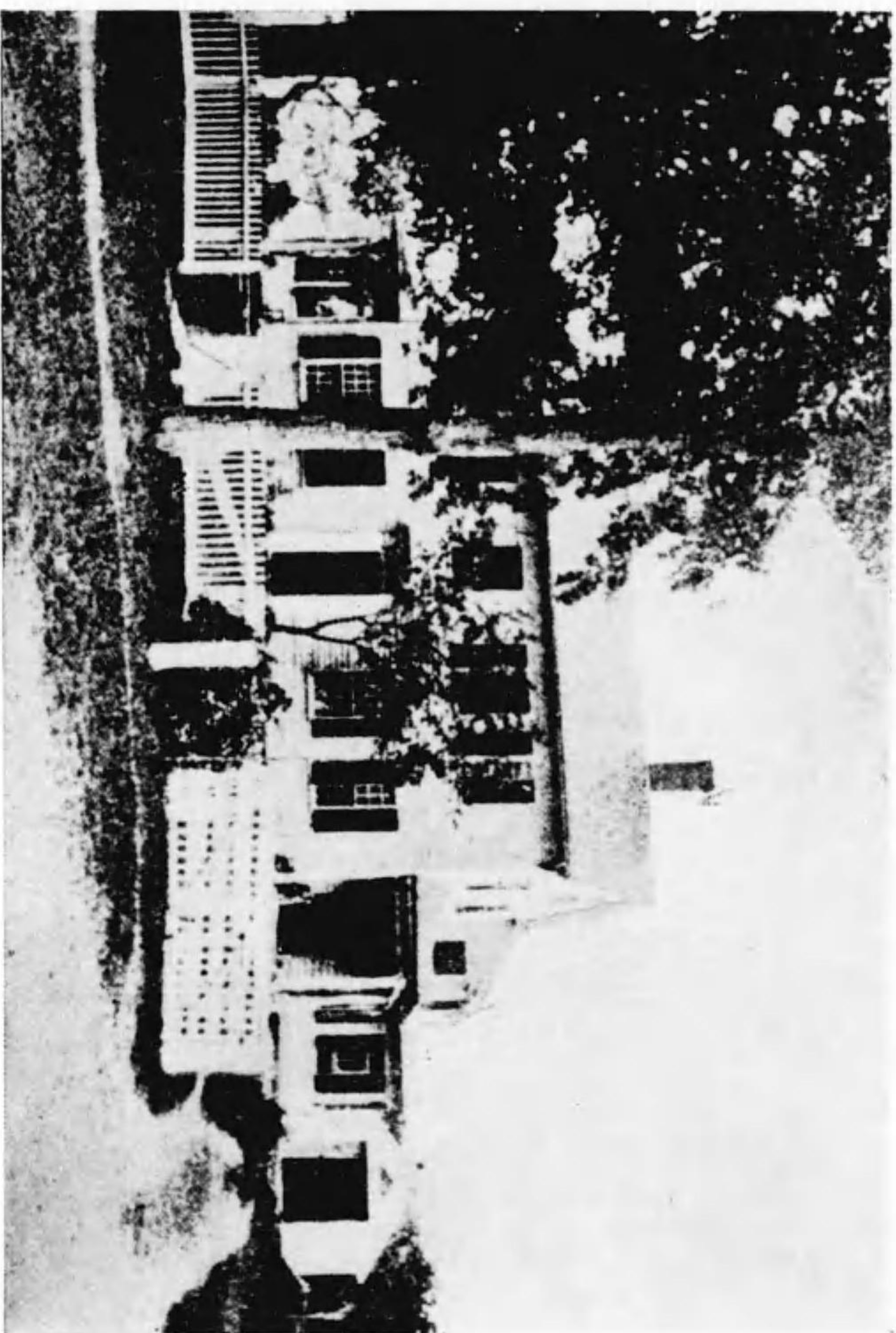
「わが生涯の尤も驚かるべきことは、肉體的にも、心靈的にも、宗教的にも、いさよき時を持ち得しこみなり」を申しましたが、この告白は取りも直さず、またムーデー自身の告白でもあるでしょう。

彼を育てた宗教と自然

ムーデーを育てた宗教的空氣は、爽快で、しかも、なかく固いものでした。彼の呼吸したも

六
のはユニテリアンの敬虔でした。ユニテリアンに云へば、何んだか、自由な近代的な、信條を無視した一派の如く思へますが、しかし事實を言へば、ムーデーが育てられた頃のユニテリアンの信仰は、今日の所謂正統派の信仰よりも、はるかに、はるかに正統的であつたのです。私共は、たゞへばチャンニングの説教をよめば分りますが、當時のユニテリアンがいかに調子の高い、敬虔の高鳴る氣風を持つてゐたか云ふことに心を留めておかなければなりません。何にいたせ、ムーデーの信仰の搖籃は彼の母の持つてゐたユニテリアンの敬虔であつたことは事實です。後になつて、ムーデーは純粹の正統的信仰を興へられましたが、その襟度に於て、いかにも廣潤なところがあつたのは蓋しかゝる氣風の感化ではないでせうか！

さらに、ムーデーを育てたものはニュー・イングランドの大自然そのものです。春に、秋に木々まわりの變化を見せる起伏多き丘陵地帯です。そして岩角の多い牧場です。ねずや木茨の灌帯です。さらに、汪洋として銀蛇をうねらせてゐるコンネクチカットの流に沿ふて展開する榆の木蔭や涼しい牧草地です！そして、他の何物よりもコンネクチカットの流そのものです！恰も人の世のそのやうに、永遠より永遠に、神秘より神秘に流れてミマならない大河の姿は、い



家たれ生のーチー

かに深い感銘を少年ムーデーに與へたことであつたでしよう！
たしかにムーデーは放浪遍歴を愛しました。「孔席暖ならず、墨突くろまず」の黨でした。しかし人生の激闘に、而して聖戦のはげしさに、うみ疲れて、ふる里、ノースフィールドに歸隊するさき、ムーデーの心は言ひ知れない満足と安住を覺えたこと云ふ事によつても、いかに彼がそれら自然に愛着を覺え、暗々裡に感化を受けて居たかをしるこゝが出来るではありませんか。

學ぶ所は人生

ムーデーは、幼い頃から書物嫌ひであつたらしく思はれます。實際また、さうした教養を受ける機会もなかつたのでありますが、兎に角ムーデーを教へたものが書物（バイブル一巻を除く）でなかつたことだけは事實です。さうか言つてムーデーは所謂無智の徒ではありません

んでした。それどころか彼ほどの頭のよさを持った人は廣いアメリカにも多くなかつたでしょう。殊に如何なる場合、如何なる人に對しても自在に處理し、應酬し得る奇才に到つては恐らく天下一品であつたかもしれません。

彼には万事に抜目の無い機敏さがあり、人の性格に對する鋭い洞察があり、更に世界の動や時事問題に對しても一種の眼を持つてゐました。

かうした意味からして、彼は新聞の愛讀者でした。彼は日刊新聞の紙面に、殊に所謂三面記事に於て、自分が戰つてゐる戦場の情況をこまかに察知することが出来ました。そして、そこから盡きせぬ説教の材料を見出したのであります。

ムーデーはまた、人間の顔を見るこゝがすきでした。否、それよりも表情をこぼしてのぞくたましひ——を見るこゝが好きであつたと言つた方が適當かもしれません。

アーサー・デイ・ピアソン氏は言つてゐます。

「ムーデー氏は恐らく現存の誰れよりも多くの人々の容貌を見たこゝであつたらう。而して我々のうちの誰れよりも多くの面識ある人々を持つて居た。しかも彼は一度彼の心に明白に残つ

た映像の一つをも忘れるやうな事はなかつた」こゝ。

彼がそのうちから智慧を掬み取つたものは人生でした。それも或る角度から眺めた人生でした。

人生の展望——而して人生の經驗——これこそムーデーにまつて知識の活ける泉でした。ですから教養ミシでの、趣味ミシでの讀書などは樂にしたくもありませんでした。ムーデーには歴史も、哲學も、科學も詩も大して價值あるものではなかつた様です。殊に小説の類に到つては彼は唾棄しました。

かくて彼はたゞ倦まず、たゆまず、實人生の頁をばぐつてばかり居たのであります。そして理外の理に通じ、學外の學に達しました。

ムーデーはまた「読み上手」よりも「聞き上手」でした。その點に於て彼は恐らく我が大隈侯に似たところがあつたかも知れません。彼は多くの學者や専門家に會つて、いろ／＼な智識の言葉を聞くこゝが好きでした。そして聞いてゐるうちに、いつしか自分のものにしてしまふ

のでした。

.....
 然しながら、たゞ一冊、ムーデーが終身愛読して止まない書物がありました。それはバイブルでした。

聖書のみ！

彼の非凡な智力——洞察力の凡てはバイブルに向つて集注されました。彼は熱心な祈り心をもつて、そして、紙背に徹する眼光を以つて、バイブルに對しました。そしてそこから、己が友たるもの、姿を多く見出し、彼らと共に泣き、彼らと共に喜び、彼らと共に感じ、生活し彼らと共に傳道しました。

彼は小説の類は嫌ひましたが、少くも彼は眞實の意味に於て小説的な見方を以つて聖書に對して行つたやうであります。

彼にまつて聖書は、神の書であると共に、人生の記録でした。彼にまつて聖書に現れてゐる人生の断片はチエホフの作品のそれよりも、幾層倍か眞實なものであり、かゝやかしいものでした。

彼の幼な友達の一人はムーデーが聖書以外に何の本も持つて居なかつたさへ明言してゐます。

彼はたゞ聖書一巻を掘り下げ、掘り下げました。畢竟彼は「二冊の人」でした。彼は聖書を「神興の書」にして受け入れてゐました。或る人が

「何故貴方は聖書を神興の書であるか云ふのですか」みたづねたとき、實に賢明な而して眞實な答をしました。

「それは私を感激せしめたからです」

回 心

ムーデーは世を征服する爲めに、如何なる武器を用ひたてありませうか。彼は現代の説教者の様に氣が利いて居ても、一向に迫力のない「教養」を武器として取りませんでした。また「趣味的」な何物をも持ち合せて居ませんでした。彼が渾身の力をこめて、眞向から、大上段に振りかざして、世に臨んだ武器は、「回心」そのものでした。彼は先づ自ら「回心」を體驗して居ました。「イエスを識り、イエスに識らるゝ」、いさ嬉しくも、嚴かなる事實を體驗して居ました。そして、かく恵まれし己が救の體驗をふりかざして世に臨んだのであります。彼の戦闘は辨慶の七つ道具を要しませんでした。たゞたゞ回心一本槍をしごいて、かゝりました。

そして逢ふ程の靈魂をキリストによる再生に導かんを努めたものであります。

而してムーデーの謂ふところの回心は主として俄然的なものであらねばなりません。電光影裡、一瞬の間に靈魂の再生を體驗したダマスコ途上の聖パウロのごとくであらねばなりません。

成程かゝる俄然的回心のある爲めには幾多の準備が心のうちに築かれて居なければならぬに相違ありません。凡そ事は成るの日に成るのではありません。まして況んや靈魂の再生に於てをやです。

しかし時充つるに及んで(しかし、その時の何時なるかは神のみ知り給ふ起り來たる回心の現象は、少なくとも人間の眼には俄然的なものとし映つらないほど、電光石火の神業であらねばなりません——ムーデー自身は自分の體驗にてらしてこの事を確言して居ます。これについて彼自身の言葉を考へて見ませう。

「私は孤々の聲をあげて十七年の後、神によりて再生した。私は神から新しい生命をいたゞいた。それは全く新しい生命であつて、自然的生命とは似ても似つかないものである。その生命は限がない。即ち永遠の生命である。私がどうしてかゝる生命を獲るに至つたか?、それは神

のみこみばをわたくしの心に受け容れるこみによつて、あつた。」

また

「救は瞬間のものである。成程人によつてはいつ死と生との境界線を突破したか分明でなく、立派に回心した人もあらう。けれども、また私は最近まで盗人であつたものが、俄かに聖者と化せ、れるものもあるこみを固く信する。私はたとへ人がつい先きまでは地獄に住んでゐる程罪深くとも、次ぎの瞬間に救はれてゐるこみのあるのを信する」

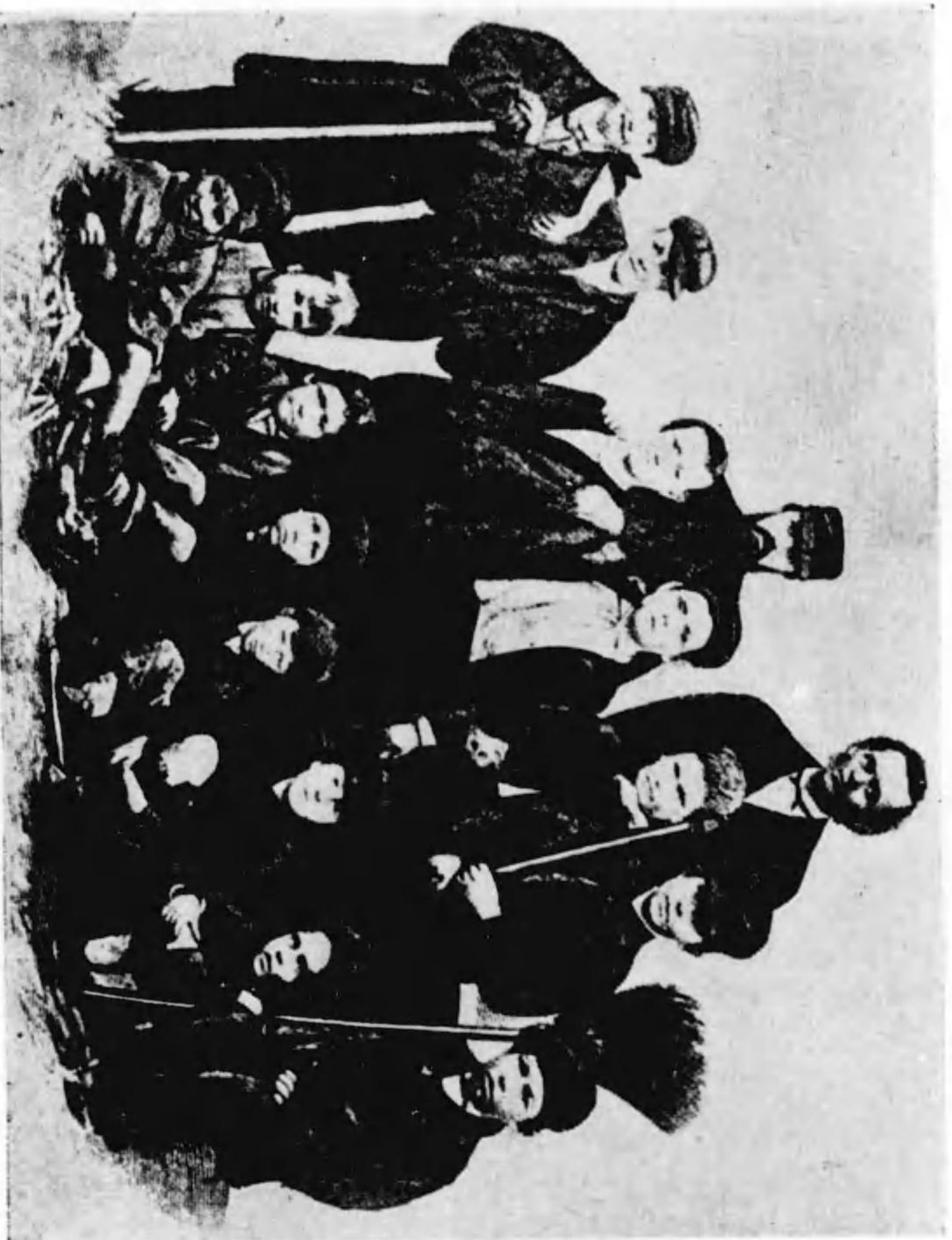
さらにムーデーの「回心」には強くはげしい召命感が伴ひました。ムーデーは己が救の喜を一人の胸に秘めおくだけの法悦歡喜で満足することが、どうしても出来ませんでした。救はれた時、彼の胸には直ちにかゝる救のよろこびを皆人に告げしらせたい傳道の思で一ぱいになりました。

彼の回心には歡喜と奉仕とが、ともなく連れ沿ふて來ました。彼の回心は、うましき神の國を想ふて、おのが心に、つきせぬ歡喜を味ふのみではなく、同時に、人の世の、傷つき、痛むた。この意味に於てムーデーの宗教は、どこくまでも、奉仕の念慮の高鳴る宗教でありました。

はじめの聖書の組——傳道

元氣のいゝ、はつらつとした青年傳道者ムーデーにまつて、しづかで上品で、學者町に云つたやうな趣のある當時のボストンは、しつくりとその性に合ふものではありませんでした。彼はもつともつこ「動いてゐる」市——シカゴに西暦千八百五十六年、居を移したのであります。最初にも己に述べておいた如く、ムーデーは、そこでも靴商賣を始めました。そして彼獨特のいかにも機敏で、抜け目のない行き届いた商法で、グングン信用を得て商人としての地位を固めて行きました。しかしです。彼にはそれよりも靈魂を漁ることの方がどれだけか愉快な仕

事であつたのでした。金を得ることよりも、たましひを得ることが彼にとつての唯一の野心でした。かくて熱い祈りゝ熟考の後、彼は断然商賣を捨て、傳道をとりました。それは言ふまでも無く非常な冒険でした。しかし信仰よりして起る大勇猛心は一切の世俗の葛藤を断ち切つて彼をして、一箇の市街傳道者たらしめました。その頃のムーデーには別に教養がありませんでした。雄辨も亦未だ試されざるものでありました。又彼を歓迎する教會もありませんでした。たゞ在るものは燃ゆる焔の信仰、一巻の聖書だけでした。そして彼を切に待つてゐるものはシカゴの街頭に、まるで紙屑同様無頓着に抛り出されてゐる貧しい人々の靈魂だけでした——彼は大胆にも、しづかな教會より、渦まく街頭へ躍り出て、仕事を始めました。事實彼は彼が屬してゐた教會の日曜學校の教師となることさへ許されなかつたものです。けれどもムーデーは少しも失望しませんでした。彼はその太つた身體を鞠のやうに軽く跳躍させて、人波の湧き返る街頭に出ました。するこそそこには、雲助の子供のやうな、手に了へない浮浪児の一團が待つてゐました。ムーデーは彼らを以つて立派に聖書研究のクラスを組織したのです。全く痛快な話ではありませんか。彼の電光石火の鮮かさよ！



聖書班の初級チーム

彼は嘗てその同業者トーレー博士にこんな暴言も取れるやうな言葉を吐いたことがあるさうです。

「トーレー君、若し私にこの窓から飛び出す方がよいと神が思召してゐるこゝが解れば、僕は早速飛び出すよ！」この勇氣です！ この信仰です。

實際それが神のお思召であるならばムーデーは莞爾としてエツフェル塔の上からでも飛び下りもしたでせう！所詮信仰は冒険です！

かくして、ムーデーの最初の聖書研究のクラスがつくられました。これについて彼は言つて居ます。

「私は二ヶ年間、自分のほんたうの働を見出し度い苦心した。が私が集會に於て感話でも述べるに、大人の連中は肩を聳かして苦笑するのであつた。そこで私は或る日曜日に思ひ切つて街頭へ出た。するに、そこにはみすほらしい、ほろを着た十八人の男の子らが待つてゐた。私は今まであんなに愉快な聖日を経験したこゝが無い」と。

それから彼の辯舌ですが、これも亦彼自身にまつて、思ひ設けぬ大きな發見であつたのでし

た。
彼自身も、また他人も、その頃まで彼が雄辯であるなど、は、夢にも思はなかつたことな
でした。

ところが、或る日、ムーデーは一人の友人ミ日曜学校の會議に出席しました。するに折り悪
しく、約束した講師の人々が皆缺席して誰一人話すものもありませんでした。そこで彼の友人
が先づ立つて話しましたが、その間ムーデーは熱心に祈つて居たのです。次ぎにムーデーが起
ちました。そして友人は彼の爲めに祈つて居ました。ところが、その時ムーデーの口から迸
り出た言葉は、まるで生命の焔でも言ひ度い位の力に充ち、熱に充ちたものでした。

並み居る人たちは驚嘆の眼をみはつて、このシカゴからやつて来た、むくつけき、熊の様な
青年の顔を見守り、彼の熱辯を傾聴して非常なる感動を心に受けました。

事實彼は生れながらの金口をもつて居た人だつたのです。たゞ要するものは訓練であり機會
であつたのです。

.....

更に驚くべきは彼の殆ど無盡蔵に思はれるほどの精力です。彼はたゞに身體が鑽石のやうで
あつた計りではありません。頭腦の働も實に健かでした。一度、決心がつくに、一度、そ
の頭のなかに、或る考が閃くと、彼はためらふことなく、直ちに實行の途につきました。
荊棘があればその上を飛びこしました。流があれば、泳いでも渡りました。彼の前には、困難
も、反對も、疲勞もありませんでした。

現に彼はシカゴに於て、正式でない教會を自分の手で建設するに到つたのですが、彼は普
通の所謂教區にたくらべて、はるかにはるかに茫大な區域を、まるで風の様な速さで思實に訪
問しました。

いや、さうもその速いこと、忙しいこと！

彼は燕のやうに家の戸口に飛び込んで、爽快な大聲で

「あなたは私を知つてゐるでしょう。私はムーデーです。それからこれが、ド・ゴライヤー君、
そしてこれが、ティン君、そしてこれがヒツチコック君です。皆さんいかゞですか、此頃は教
會へよく出ますか、日曜學校はいかゞですか？ 冬の間、石炭が足りなくはないですか、さあ祈

りませう！」かう云つた調子です。

訪ねられた人も恐らく眼をバチクリでしたらうが、ムーデーについて行つた人たちは恐らく肩で呼吸をして居たことでしょう！

彼は若い頃からいかなる事業の経営に對しても、素派らしい腕前を持つてゐました。が、また、云はゞ人情の機微にも通じて居て、人々を導き、且つ使ふこゝが大層上手でした。

彼は人々を働かせる計りでなく、働き度い氣持にならせる力を持つて居りました。ほかならぬムーデーさんのためならば……云つた感激を人々に與へました。

それから一見甚だ困難に感ぜられる金の問題ですが、これもムーデーにまつては、そんなにむづかしい問題ではありませんでした。

彼は先づ自分の誠意を人々に徹底させました。たゞそれだけでした。金はたゞ彼の誠意の後から否應無しに従いて來ました。

その金を彼は神からの賜物として、誰に遠慮も無く、ドン／＼傳道事業のために用ひて、百

パーセントの能率をあげました。

これに關聯して考へたいことは、ムーデーの眼中には貧富の區別のない一事です。實際、徹底したもので、金持だから言つてベコ／＼頭を下げるやうな事は斷じてしませんでした。貧乏人だに云つて輕蔑する様な事はなほありませんでした。彼にまつては誰も彼もが、救はるべき部類の人間たちでした。駟馬に鞭つて疾驅する大官も、路傍の乞食同様罪人でした。

ムーデーはどんな人にあつても、彼の口辭のやうに言ふ挨拶「あなたは信者ですか？」を真先きに浴びせかけました。

かうした凄じい勢で、彼はシカゴの市中を毎日飛び歩いて、迷へるたましひを拾ひ集めました。

かゝる十年間の經驗は、彼の内にある、あらゆる力を心ゆくまゝに延びさせたものでした。かくて彼は傳道者として、素派らしい成長を遂げたのであります。しかし彼には、もつこ、

もつゝ広い世界が手をひろげて待つて居ました。

嘗てマセドニア人がパウロの夢枕にたつて、彼の傳道を慫慂したやうに、大西洋をへだてた同國語の大きな國が切にムーデーをさしまねいて居ました。恰かも「あなたの働く可き舞臺はここにもありますよ」一言ふやうに……。

ムーデーは遂にその伴侶サンキーと共に、一人は煙の舌、一人は春風の如き歌聲を携へて海を渡つてイギリスの地を踏みました。そしてそこに於て空前の靈的大運動をおつ始めたものです！

單純！ 單純！

ムーデーは、世の中にいろいろな傾向を好む人のあることをよく承知して居ました。神學を要する人達のあることも知つて居ました。宗教と藝術との提携を求めてやまない人々のあるこ

とも知つて居ました。或ひはまた幽寂玄妙な神秘の世界に靈魂を沈潜させることを、こよなき願ひして居るやうな人々のある事も知つて居ました。しかしです。彼は街頭の人々——大衆の求むるところのものが、矢張り平凡ではあつても力強い、單純ではあつても端的に心に迫るものを持つて居るところの、聖書の福音そのものでなければならぬことを、尤もよく知つて居ました。故に彼には神學がありませんでした。彼には藝術がありませんでした。彼は恐らくシエクスピアを少しも要しない人の一人であつたかも知れません。(この點はリンコルンに違つて居ました。リンコルンは聖書の愛讀者であると共に、また沙翁の愛好者でした。)

彼にはまたたゞ選ばれた少數の人々のみが、心ゆくまゝに、自在に、飛翔する事を許されて居るやうな、高い世界も、深い世界も持ち合せては居ませんでした。ムーデーの福音は、あくまでも平明で、まるで、眞晝の大道のやうに、はつきり一筋に通つたものでした。而して彼は前にも述べたごとく、さうした救の大道を一卷の英譯聖書のうちに見出し得たのであります。彼は聖書を神の書と見做して、全一的にそれを信じて立つたものでした。訓誥、批評の委細は、彼の好む所ではありませんでした。

こゝに彼の信する福音を要約して言つて見るならば

「聖書が絶対的の意義に於て神の書であること——

而して聖書は人間が生れつき罪があり、且つ恩恵より離れて居る事——

神の子がわれらの罪の贖のために十字架にかゝつて犠牲になり給ふたこと——

その聖き血の贖を受け、その態度をわれらの生活に現すことによつて、われらは地獄よ

り脱れて天國を保證されること——」

これだけです。ムーデーが生涯に於て喋々した幾十萬言も、結局かうした單純な福音の布衍にしかすぎません。まことに、それは古き物語であります。オールド・オールド・ストーリーであります。しかしながら同時にまた、日々に新たなるめぐみの體驗でもあるのです！

愛の教

こゝに今一つ、ムーデーの説教について注意しなければならぬ事は、世の所謂福音宣傳者のなかには、好んで、死や地獄や、刑罰やその他の、くらく、恐ろしい題目によつて人々を恐怖させる向があります。或る場合には、さうした事も必要かも知れませんが、悪く行くこ、おどし文句になつたり、地獄の責道具に墮したりし勝ちであります。われらのムーデーは何んでも聞いこは嫌ひでした。明るいこがすきでした。

従つてじめじめして居ない、「日當りのよい」教が好きでありました。これは疑もなく彼自身の明朗な性格に原因するのでありませうが——。彼は決して死や地獄を主なる題目とするこもなく、たゞ、愛を説きました。測りがたないキリストの愛を高調しました。故に彼の説教は、どこから見ても嚇し文句にはなりません。差しづめ、あの死云ふ字の大嫌ひな十

八世紀のジョンソン博士などが聞いたならば、大いに喜ぶ説教家であるに相違ありません。

尤もムーデーは地獄の苦惱を説かないわけではありませんでしたが、それはいつも底流をなしてゐて、言説の表面には殆ど現れませんでした。

彼はその頭のなかに、いつも、ミケランヂエロのやうに恐ろしい最後の審判の光景を想像しては居ませんでした。彼がいつも心に描いてゐた繪は、走り出て放蕩息子を抱いてゐる、いくし深い父の姿でありました。

ライマン・アボット博士はムーデーの説教についてこんな事を書いて居ます。

「未來の刑罰について聞いた、尤も恐ろしい説教はムーデー氏の『子らよ、心に臆えよ！』と云ふのであつた。しかし、それもたゞ放蕩、懶惰、背信によつて月日を空費してしまつた者の歎が、現在又將來に於て、いかに傷ましいものであるか云ふことの、眞實なる描寫にしか過ぎなかつた！」

颯爽たる大説教家

ムーデーが尤もムーデーらしい偉大さを現すときは、彼が幾千の聴衆を前にひかへて、ブラットホームに立つた時であります。かゝる時、彼の全容が輝き出します。その眼、その眉、その手の動き——凡てから彼の氣魄が迸り出るのであります。教壇に立つたときのムーデーと、街頭をゆつくり歩いてゐる時の彼と、如何にその感銘が違つて居るかは、親しく彼を観察して居る或る人の書いた次のやうな記事にでもよく窺へます。尤もそのうちには多少の誇張があるかも知れませんが……

「ムーデーが働をして居ないとき、凡そ世の中で、彼ほど面白くない、空虚な人間はないかのやうに思へる。彼の顔は少しの魅力もない、彼の眼はどんよりとして輝がない。その全體の調子に、如何にも勢がなく、その言葉もしどろもどろである」

然し同じ記者は、演壇上のムーデーを評して次の如く言つて居ます。
 「眼の前にむらがる群集を見るべき、彼は全く別人となる。喜の音信を告げ擴めてゐる云ふ自覺は彼の全身を鼓舞し、彼の眼にかゝりやきあらしめ、その舌を焰に燃えしめ、彼の少し鈍重な、扱ひにくさうな體軀にも一種の品位を與へる」云。

彼の説教について

ムーデーの説教に修辭學は必要でなかつた。彼は誇張せず、粉飾せず、たゞ單純に、たゞ卒直に福音を説きました。

これについての彼の言葉——
 「神が、もしもあなたに使命を與へたならば、須らく神があなたに知らせたと同じ様な形式の言葉ミを以つて人々に傳へなさい。たゞ雄辯であり、たゞ能辯であると言ふことは甚だ馬鹿

げた事にしかすぎない」云。

彼は多くの場合、手叩へなしで説教をしました。これは彼が文字や説教の構成に囚はれることがない爲めであり、聖靈の働をして、更に自由ならしめるためであつたのです。勿論彼は説教の準備を怠つたり、無視したりはしませんでした。それどころか、非常に細心に、克明に、準備をしたのでしたが、いよいよよきになると、それを超越して、聖靈に促がさるゝまゝに語りました。所謂「格に入つて格を出づる」式の説教でした。

有名なホイットフィールドの言葉——

「一度私が語り初める時、主の聖靈は私に自由を與へる。そしてそれは遂につむじ風の如く凄じい勢で吹き下し來つて、すべてのものをその前に引きよせてしまふ——この語はムーデー自身にとつてはさながら自分の爲めに代言してくれたものを受け取られたことでしょう！ですからムーデーの説教には作爲の跡が見えません。卒然としてブラットフォームに立ち、卒然として語り出づるが如くに思はれたものです。

しかしながら恰かも巨匠の素描の線にも深い用意が潜んでゐるやうに、ムーデーの無難作に見える説教も、實は並々ならぬ準備と祈とがあるのです。彼は同じ題目について語ることを少しも恥しませんでした。(如何んになれば彼は自己の創意を述べんするにあらすして神の福音の證明を爲さんと意圖せるが故に)、たゞその説明として、その材料として、常に目新しい、新鮮な逸話や事實談を挿入して、全體の印象を全く新しいものにするこゝを怠らなかつたものです。彼の讀書も實はその爲めの讀書であつた位です。

しかしです。何にもまさつて彼が熱心に務めたのは、祈禱と聖書の愛讀とでした。彼は人を感じさせる前に、先づ自分が語らんとする福音の事實に對して深い感激を持たなければならぬ事を熱く知つて居ました。單なる論理の遊戯や、修辭の曲藝!は、彼にまつて惡魔の誘惑でした。彼はたゞ自分の靈魂のいゝ深く強い感動を、人の心に傳へたい一念だけで、説教の準備をしたのです。

彼がいかに敬虔な、そして白熱的な氣持で聖書に對したかは、次ぎの語に於てもよく窺はれます。

「私は聖書をこり上げて、私の示めされた題目について、それが何を語つて居るか見究めたるためによみ始めた。かくて祈りながらその章句をたどつてゐるうちに奇しく尊き主のお憐憫は全く私を覆ひつくして、私は覺えず、書齋の床上にひれ伏してしまつた。そして開かれた聖書に顔を埋めて、まるで子供のやうに嗚咽した……」

活けるバイブル!活ける準備! かくして始めて活ける説教があり得るのです。

彼の身振り

疑もなくムーデーは熱心、焔のやうな説教家でした。従つてその説教には手振り、身振りの華かなものがあつたらうと思像され勝ちであります。實はさうではなくて、彼は常に感情の抑制に心がけてゐた。周到で、沈着な説教家であつた云はれて居ます。彼は説教するに當つて、顔中に火花をちらしたり、奴胤が踊るやうな眞似はしなかつたさうです。勿論彼にも充分

エスチュアはあつたのでしようが、それはゆつたりして、底力のあるものであつたらしく思はれます。彼には末梢神経的なところはどこにも見出せなかつたのでして、この點は後來のビリー・サンデーなどは余程違つた點がありました。

これについて私は同じやうな意味深い情景に接したことが一度あります。それはある信仰復興の爲めの大集會に於てでありました。その時の説教家は（現在の人物）イギリス人で、非常に熱心な傳道者でしたが、彼はその演壇から、いかにも悠揚とした態度でゆつくりとした、しかし巾のある、そして深味のある聲で、非常に靈感的な獎勵をしました。ところが、それに聞き入つてゐる會衆のうちには非常な感動が起り、或る者は肩をふるはして嗚咽し、或る者は手ばなしで號泣するに云つた有様でしたが、それを壇上の獎勵者は、何か不思議なものでも見るかのやうに、頭を回ぐらして、あちらこちらを打眺めながら、少しも變らない、ゆつくりとした、迫らない口調で説教をつけて行きました……私はその時の印象が未だに忘れられません。何んだか「山上。山下」に云つたやうな感じに打たれました。大海。泉水……猛虎。狗犬……私のころにはいろいろな對照が浮んで來たものです。ムー

デーの場合も恐らく同じであつたでしょう！ 兎に角ムーデーは大波のうねりの様な心の感動にふさはしい、ゆつくりとした身振りで説教をしたものと思はれます。現にライマン・アボット博士もこれに關して次ぎのやうな證言を與へて居ます。

「ムーデーは心に深い感動をたへて居たが、その表現はいかにも靜かで、その口調は、改まつたところが少しもなく、對話的であつた。嘗て大聲叱呼した事もなく、芝居じみたこともなく、その身振はいかにも簡單であつた」。

本當の靈感的説教家はかくの如きものではないでしょうか。私はバックストーン師の説教を聞く毎に常に同じやうな印象を與へられたものでした！

尤もムーデーはよく早口に説く事がありました。その點はフィリップス・ブルックスに似て居るに云ふことですが、しかし、それも決して聽者に何んもなく押しつまつたやうな、忙しい感じは與へなかつたに云ひます。

用 語

彼の用語は、あくまでも平俗で、そして短くありました。彼は人々が街頭で語り合ひ接し合ひ、取引をする簡單平明なこゝばしか用ひませんでした。字引を引つ張らなければ出て來ないやうな用語は一つも用ひませんでした。誰にでもよく解る言葉を用ひました。實際また彼の説教は誰にでも、よく解りました。

それから彼の用語は短いものばかりでした。

彼は意識して用語を短くしました。

ゴス博士は小説家の用語について興味ある比較をこゝろみて居ますが、そのなかに

「五百三十語計りを使つて説教するときに、ムーデーはそれを三十六の文によつて現し、スバージョンは廿一、ブシユネルは廿、チャールマーズは九つの文によつて現す」云、いつてる

短 い 説 話

ます。これら天下の大説教家にくらべて、用語の短いこゝにかけてはムーデーが第一人者であつたこゝが明白ではありませんか。それだけムーデーの表現は平明であつた云へます。

ムーデーの説教はみな短いもの計りでした。山鳥の尾のながく長談議などはしませんでした。手短に、感銘深く、片づけました。

聞くが如くんば、イギリスの十七世紀の大説教家の一人であるパーロー博士の説教は三時間半がおきまりであつたか。「眠れる會衆」たらざるを得ないではありませんか！かうなれば折角の大説教も子守唄同様のものになりはしないでしょうか！

世の多くの説教家——殊に所謂能辯な人々の説教はその終が甚だ未練がましいものであります。換言すれば甚だ思ひ切りの悪い、低徊的なものになり勝ちですが、ムーデーは止めを指

すころでちやんこ止めを指しました。その結果彼の説教には爛々たる餘韻が漂ふことになるのです。即ち印象的になるのです。一部分を描いて全體を香はせる云つた様な味あるものになつたのであります。かゝる表現は彼の技巧であつた云はうよりは、むしろ性格的のものであつたかもしれません。

彼の祈禱も亦それに似て簡明でした。

世の祈をする人々が、みなムーデーの如くであるならば、さしづめチャールズ・ラムは彼「食前のいのり」のやうな皮肉な隨筆を書く事はしなかつたでしょう。

は言つて居ます。

「私は、他の人が十五分間でする祈を、五分間でする。十五分の祈を靜肅に守り得るやうな集會は有り得ない。若しも諸君にして短い祈が出来ないならば、一層よした方がよろしい。

一體長い祈をする人は自分の家に於て殆ど祈らない人にきまつてゐる」云。

力の秘訣

しかし、彼の説教をして力あらしむる最大の原因は、彼が正直に、卒直に、一箇の人間が留意なく他の人間に話しかけるやうな態度で幾千の聴衆に臨む云ふ事でした。

彼は言ふ。

「私は力説したい。私は説教してゐるのではなくて、たゞ話しかけて居るのだ云ふことを——。實際私が説教するのではなくて、話しかけてゐる時に、尤も對者の靈魂をつかむ事が出来るからである。

この間の晩、私は暗闇のなかを家路へこ歩いてゐるに、私のすぐ後方から来る二人の人がその晩の集會の事について語り合つてゐるのを聞いた。彼らの一人が言ふ

「ムーデーは今晚説教をしたのか？」

他の一人が答へて云ふ

「いや、ムーデーはいつでも説教などはしないよ。たゞ談話を交すだけだよ」

これを以つてしても彼の説教がいかにも平明であつて、且つ親みの籠つたものであつたかゝ想像出来るではありませんか！若し現今の各神學校の壁上に、「説教をするよりも話しかけよ」

云ふ單純な文句が記されるならば、もつこ確實に罪の世を救にまで導くこゝが出来ないのでないでしょうか？

彼の謙遜

噴々たる名聲を贏ち得て、しかも、心からなる謙遜を保ち得たこゝ彼の如きは稀であります。彼は心の底から自己を弱しし、自己の力に恃まず、全く貧しい心を持ちつゞけて居ました。

従つて彼は説教のうちに自己について語るこゝを慎んで居ます。彼はひたすらに神について語るこゝをのみ願つて、自己について語るこゝを避けました。世の思慮無き説教家のうちには自分が行きすりの人の爲めに下駄の鼻緒を上げてやつた位の事をもつて、恰も、それが神の愛の現で、もあるかの如くに、長々吹聴する人も間々あるやうですが、ムーデーは自分のなした善事については断じて口をつぐんで居たのであります。

或る集會に彼の同勞者の一人が説教中甚しき反對に出喰はし、會果て、後に、切りにムーデーに不平を訴へたこゝろ、ムーデーは、
「皆が君に反對した理由を言はふか？」

「言つて下さい」

「君があまり自分の事を言ひすぎたからさ」

こゝ極めつけた云ふ逸話も残つて居ます。

彼はまた言つて居ます。

「人間が偉大になり行く最も明白な證明は、神が増し加はり、自己が減じ行く云ふ事だ。あ

る人々は矢鱈に「私、私、私」を言ふ。

五分間の説教に四十九度計りも私を言ふ連中がある」こ。また

「現代は自己誇大の時代である。大いなる「自我」の時代である」こ。

しかし彼も雖も「自我」をして神に承服させるためには血の出るやうな靈魂の苦闘を経験したのであります。彼の告白の一つに

「四ヶ月間云ふもの神は私自身のいかなるものであるかを、よくお示し下すつた。私は全く自分が野心満々たるものであることを發見した。私はキリストのために説教して居るのではなかつた。野心のために説教して居るのであつた。私は私の心が、そこに存在して居てはならないやうなもので充ち充ちてゐるのを發見した。この四ヶ月間、私の心には非常な暗闘が行はれ、その間、私は世にもみじめな人間であつた」こ。彼はかく自己を否定して居ましたが、それよりも更に美しいのは、彼が常に他人の徳を建て、他人を心から推重した事でした。そして、それが決して偽善的な心持からでなく、深い謙遜な思からであつた云ふ一事でした。これについてトローレー博士は次ぎの如く言つて居ます。

「ムーデーは、ほんたうに、いつでも自分を後にして人を先にした。彼が私達若輩と共に同じ演壇に立つ時、「私より後に、ずつと立派な方のお話がある」こ、まごころから、どんなに度々聴衆に向つて告げた事であつたらうか。……考ればおもしろい話だが、あの偉大なムーデーは自分より後に話す者共が、自分よりずつこ偉いこ信じ切つて居たのであつた。彼は決して表面だけの謙遜を装ふやうな人ではなかつた。彼は心から神が自分よりも他人の方を更に有用に、さらに大きく用ひ給ふこを固く信じて居たのであつた」――

トローレー博士の言に虚偽があらう筈がありません。

私はムーデーの眞に偉大なる謙虚な態度に對して頭の下るのを覺えずには居られません。

華かな尾を曳かず

ムーデーは自分の後に華かな尾を曳いては居なかつた……何んだか奇妙な言ひ現し方であり

ますが、所謂偉大な人々——殊に文士や説教家は得て華かな尾を曳き勝ちなものです。それでは、謂ふころの華かな尾は何んでしようか？、その人を崇拜して止まない婦人連の事です。

キユーゲルゲンの「自叙傳」をよむと、文豪ゲーテがいかにも、この華かな尾の爲めに惱まされたかが如實に描き出されて居ます。

しかし世の説教家のうちには、かうした尻尾を曳くこゝが大好きな人も間々あるか聞きます。

誤聞かも知れませんが、名だたる禪宗の高僧は、説教する時、きつと「華かな尾」の一團に一瞥を與へて、さて徐ろに演壇に上ることにして居るこゝが聞きます。それが非常に説教の効果を強めるこゝで。……しかし、わがムーデーはいたつて淡泊でした。

婦人連に熱狂的な讃頌や感激の涙の花束を投げられるこゝは金輪際いやであつたらしいのです。

ダフアス氏も言つて居るやうに、ムーデーは、

「大騒をする婦人達の玩具にはならなかつた」のでした。

こんな逸話も傳へられて居ます。——
或る集會の終つた時、彼の崇拜家である男が澤山の熱狂的婦人連に是非ムーデーに握手をさせる約束をしました。そして會場の出口で待つて居るこゝ、

ムーデーは持前の熊のやうな巨軀を轉がすやうに運んで、彈丸のやうに馬車にこび込み、ちよつと帽子をこつたかと思ふと、もう見えなくなつてしまつた。

待ち設けて居た婦人連はたゞロアングリ……「アツ」云ふ外何の文句も出なかつたか……。結局彼はそれほど自己の名譽や誇を蛇蝎視してゐたのでありました……。

サンキーとの提携

稀代の小説家ムーデーがサンキーを見出し得たと云ふこゝは、鬼に金棒を與へたも同然で

した。

ムーデーの雄辯がたましひの玄關に立つて大音聲に救の音信を呼ばはる聲であるならばサンキーの爽かな讚美の聲は、ほとくミ、かほそく、心の戸を叩く音信のそれにも比するこゝが出来るかと思ひます。

ムーデーに見出されるまでのサンキーは何をして居ましたか？。たゞ一箇の平凡な小吏であつたのです。

西暦千八百四十年、ペンシルヴァニア州の小さな町に生れ、質實な家庭に育つて、長じて南北戦争に従軍して後は、税務官吏として、たゞこつこつと版で押したやうな官吏生活をして居たのでした。

その間に彼は妻り、三子をあげました。このまゝで行つたならば、サンキーは何らの現るるところなくして、平凡に、しかし平和に生涯を終つた事であつたでしょう。しかたゞし一つ彼には卓れた美聲ミ、はげしい音楽に對する白熱がありました。幼い頃から彼は歌ふこゝが好きでした。彼にこつては歌ふ時ほど幸福な時はなかつたでしょう！それほど好きでありました。

彼はその自叙傳のうちに言つてゐます。

「私は歌ふこゝが好きであつた。それは生來のものであつた。私は子供のこゝから歌つてゐた。そして文字通り音楽に浸つてしまつた」ミ。

彼はまだ八つの頃既に随分むづかしい歌曲をも歌ひこなすこゝの出来たこゝ——それからたゞ歌ふだけでなく、作曲にも深い興味を感じて、創作をつゞけてゐた事なども記して居ます。神の召命の指頭がこの一點にミ、まつた事は當然であります！

サンキーの發見

それにしても、ムーデーがサンキーを見出したこゝは、何んミ云ふ唐突であり、何んミ云ふ偶然であつたでしょうか！、しかし更に考へて見るミ、私共はそこに深い神の攝理をよむこゝが出来ます。——

ムーデーとサンキーとの邂逅は實に聖書的でした。……云ふ意味は如何にも聖書のなかにも出て来さうな光景であつたのです。事の始まりも電光的、事の決定も電光的です！實に痛快であります。

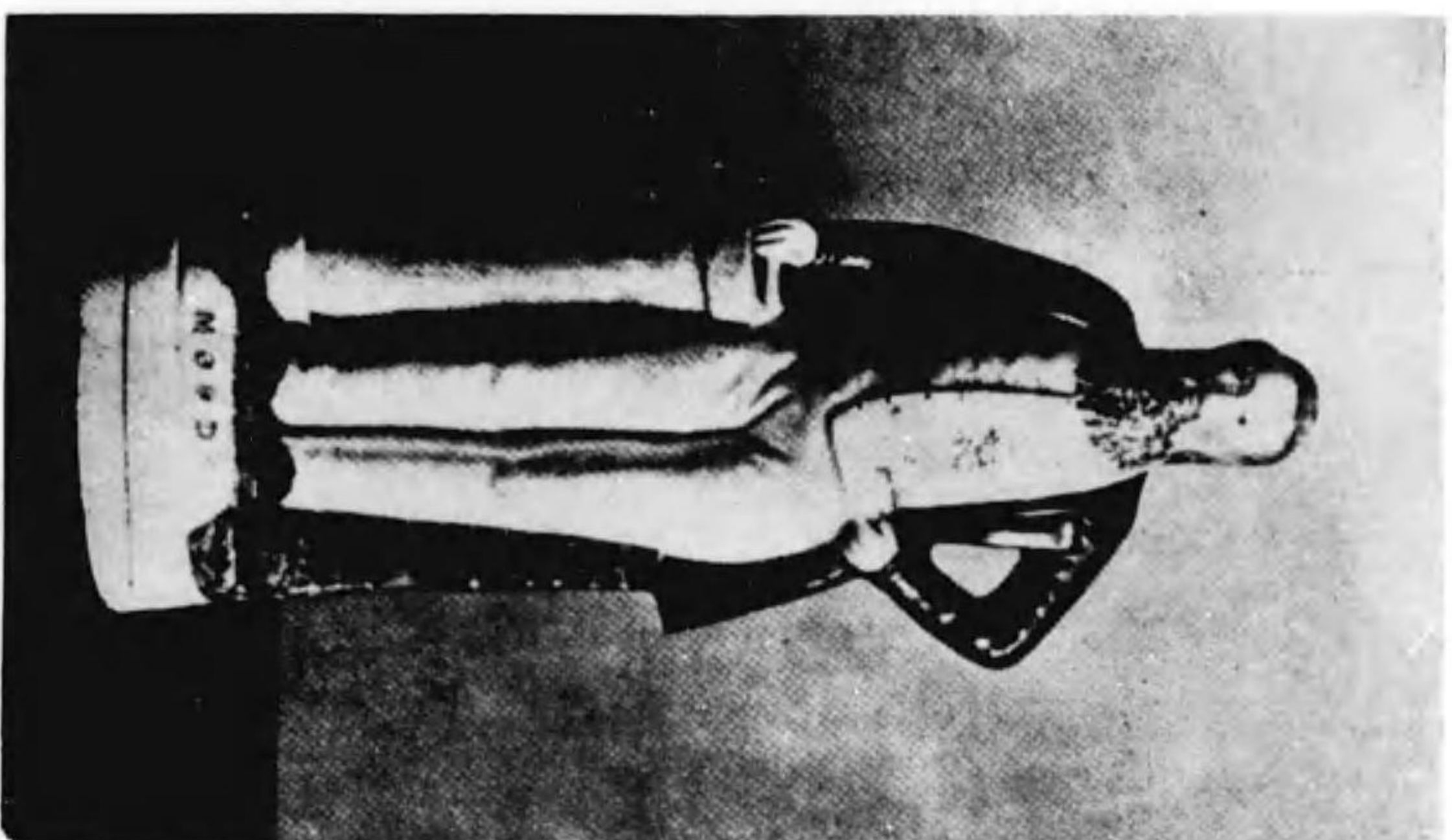
人間臭い思慮分別などはどこにもないのです。

「エイツ」とムーデーが掛聲をかけた……「オウツ」もサンキーが應じた……たゞそれだけなのです。かりそめの街頭の邂逅に、心と心の火花が散つたのです。！これに關するサンキーの告白をよむとき、全く三斗の溜飲が下がります！

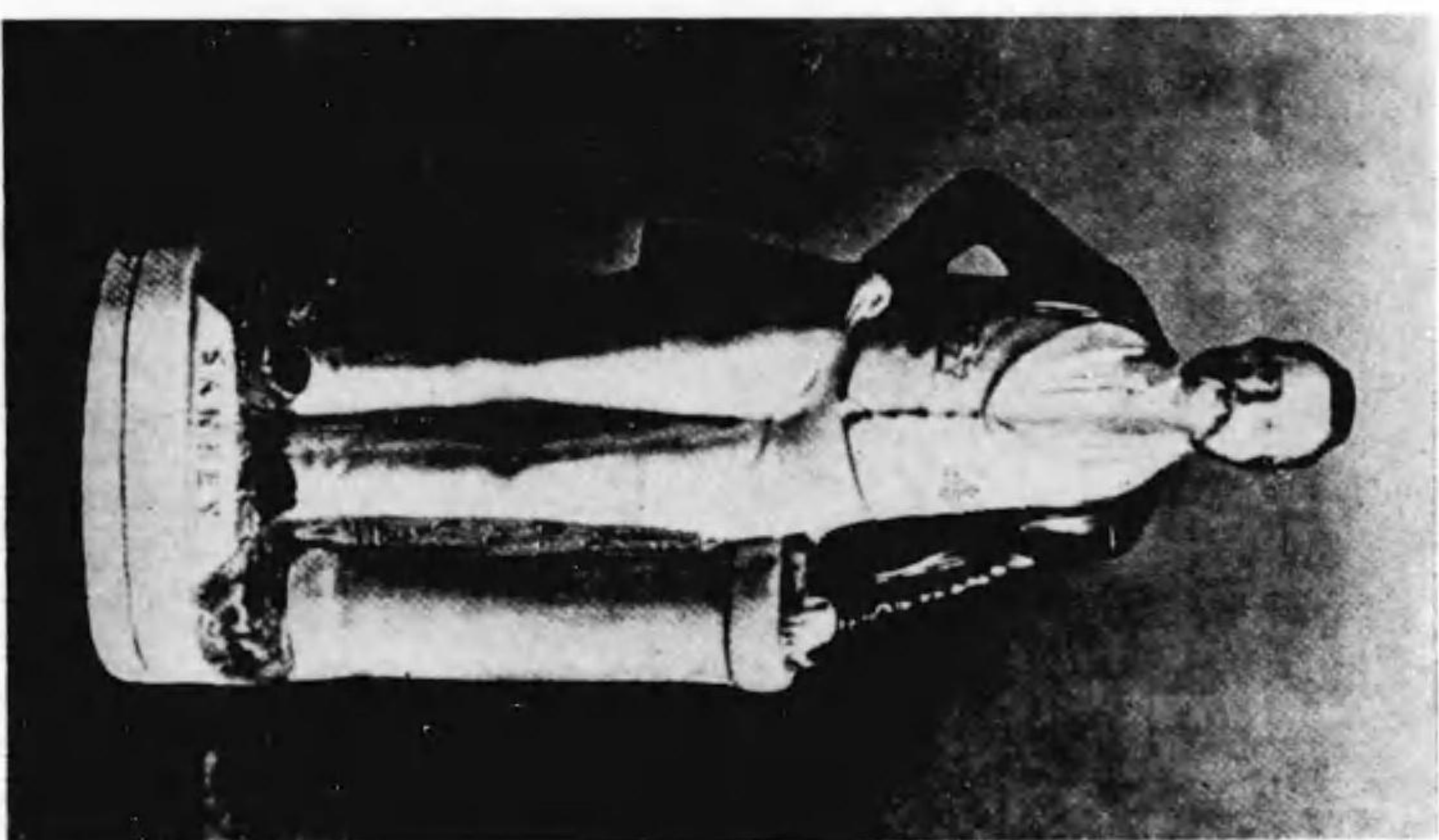
ありやうは次の如くであります！

西曆千八百七十年のこと——、或る日ムーデーの集會にサンキーが何心なく出席した。するに讚美歌のいゝ指導者がなかつた。それについてムーデーがいさゝか困惑してゐる様子を見て、サンキーがすゝんで歌の指導をやつた……

ムーデーは初めて彼の美聲をきいた。いや、それよりもサンキーの音聲の心靈的要素の豊さに打たれた。その瞬間彼の眼は發見のよろこびにかゝやいた。彼はつかつかとサンキー



偉大のムーデー



偉大のサンキー

の傍により、ムヅミ太い掌でサンキーの腕を捉んで持ち前の卒直さで言つたものだ……。

「君はどこに住んで居るのか」

「ペンシルヴァニアのニューカッスルに」

「結婚はしてゐるのか」

「しかり」

「子供は幾人あるか」

「二人」

「仕事は何だ」

「税務官吏」

「さうか！、君は今、何もかも棄てなければならぬぞ。僕はこの八年間、君のやうな人を探して居たのだ。ニューカッスルを疊んでシカゴに來給へ。そして僕の仕事を手傳つてくれ給へ」

卒直も卒直その昔のキリストの召命を想ひ起させます。全く聖書的な問答です！

ところでサンキーが殆ど何らのためらふ事もなくこの勸告に應じたのです！この瞬間こそ大信仰復興の導火線に点火された時であつたのです！

サンキーの獨唱

サンキーは敢て、その技巧のありたけを盡して聴衆を魅了しようとはしませんでした。たゞ彼は心からなる感激を以つて福音を歌ひ、そのリズムを聴く者の心情に傳へようとしたのです。即ち彼の獨唱は靈魂がたましひに向つて呼びかける聲でした。それ自身ながらに、神の召命の聲でありました。彼の歌を聞くほどの人が、強い感激を胸に呼び起した所以は、こゝに在るを考へます。

彼はムーデーが神を説くのに對して、神を歌つたのでありました。彼の歌聲は、或る靈魂に對しては召命の告知となつてひびきました。或る者にはそれは心の故郷からの呼び聲でありま

した。或者はそれを聞きながら想は、遙かに幼かりし日の追懐に歸つて、今更の如く、今は世に無き慈母の搖籃の歌を想ひ起して、母なつかしの涙に咽び泣いたこゝであつたでしょう！

何にしても、サンキーの歌は人生の薄暮に迷ふたましひにこつては救の聲そのものであつたのです。彼の歌は涙を呼びました。聖き回想を呼びました。愛の家を想はせました。父の住家を想はせました。……

彼は樂器としては柔かな音色を持つた小型のオルガンを撰びました。そして彼は獨唱をしたのであります。彼は自分でオルガンをひきながら、歌ひました。

彼はまた獨唱をする前に、度々靈感的な序言をこゝろみました。例へば彼が最も得意な讚美

歌

「九十九の羊」を歌ふときには、それに先だつて、必ず放蕩息子に關する活ける事實談を手短かに語るのです。それが彼の獨唱をしてどれだけ有力ならしめたか知れないほどだと言ふことは、

二人の友情

ムーデーとサンキーとの友情は世にも羨しいものでした。互に固く信じ合つて居て生涯變るどころがありませんでした。後になつてサンキーは年も取り、聲も以前ほどではなく、ムーデーもその傳道方針を改めたりして、二人が提携して大英帝國を訪づれた頃ほどの協力もなくなつたのでしたが、それも二人の友情に何らかの決裂が生じたわけでは斷じて無かつたのです。そして二人の友情はいかにも自然で、何等作爲の痕もなく、自由でしかも美しいものでした。ムーデーは此上なくサンキーを愛し重んじました。サンキーはサンキーで、この偉大なる靈的指導者に絶対の信頼を置いて、いかにも謙遜にムーデーに従つて居たのであります。またムーデーは自ら歌ふこゝろを出来ませんでした。サンキーの獨唱の價值については誰よりもよく認めて居ました。

ムーデーはサンキーの獨唱をどれだけ聞いたか分らないほぎでありました。しかし度重なるに従ふて、ムーデーは益々サンキーのうたに心をひきつけられました。

サンキーも亦幾回か同じ内容の説教をムーデーから聞かされたものでした。けれども回を重ねるにつれて、益々強い感激をムーデーの説教から受けたのでした。

サンキーは常に言つて居ました。

「私は決してムーデーの話の聞き倦きるやうな事はない」ミ。又彼はムーデーが不信者の悲愴な臨終についてあまた度語るのを聞きましたが、それにも拘らず彼は非常に強い感動を與へられたと見えて、或る人が次ぎのやうな事を記して居ます。

「サンキーは全くムーデーの描寫に心打たれたものらしかつた。いよいよ説教が終つて彼が頭をふり仰いだ時、私は彼の目が充血し、涙千行の有様であるのを目撃した」ミ。

凡そ古今を通じて最も、善い道づれを以つて目されてゐるのは、蓋し

ドンキホーテとサンチヨ・パンザ

のそれでありませんが、ムーデーミサンキーミの提携は更に興味深いものがあります。たゞ違ふところは一つ――

ドンキホーテミサンチヨ・バンザは、夢を追ふて、遂にみじめな幻滅に會ひ、互に手をこり合つて悄然として故里に歸つたのに比して、ムーデーミサンキーミは夢を追ふてしかも夢を實現するこゝが出来、互に手をこつてシオンの大路を闊歩するこゝが出来た點にあります。

.....
根本は友情です。神に依れる友情です。これなくしてはいかなる運動も藻抜の殻であります。

.....
ムーデーのこゝば――

「お、『千。ミ。せ。の。磬。よ。！。わ。が。身。を。圍。め。』を歌ひ見よ、程なく帽子は脱がれるであらう。そして人々は遠き日に、彼が未だ幼かりし時、いつくしみ深い母が歌つてくれた懐かしい調を想ひ起して、涙に咽ぶにいたるであらう。やがて彼は、諸君に聖書の朗讀を求めるであらう。それか

ら祈をも、求めるやうにならう。かくて諸君はいつしか祈禱會の席上に於て彼を見出すまでにいたるであらう」ミ。

ムーデーは音楽の技術については何にもしらなかつた。しかし救靈の働に際しての音楽の必要を誰れよりもよく心得て居ました。

ムーデーは語り、サンキーは歌ふ

二人を結ぶものは、信仰による篤い友情

彼らの傳へるところは、ともに尊きキリストの御苦難ミその贖罪の秘義！

偉大なる人間

ヘンリー・ドラモンドは嘗て言つた事があります。

「ムーデーは自分の嘗て會つた事のある人のうちで最大の人間である」。

實際彼ミ久しく仕事をこもにしたほどの人は皆なドラモンドと同じ感想を彼について持つたものでした。彼は聖者であつたかもしれせん。しかし、それよりも彼は偉大なる一箇の人間でした。

先づそのがつしりとした、鐵石のやうな體軀に於て、而してそれ以上に、彼の博大な同情、すべて人の心の動に對しての鋭い洞察、愛の勞苦を露厭はない靈魂の悲壯美に於て、換言すればその豊かな精神内容に於て——彼は稀に見る偉大な人間でした。

彼の健康

ムーデーは殆ど完全な健康を所有して居ました。彼は充分衛生に注意した事は事實であるが、その位の注意ならば他の人間だつてやつて居るのです。結局彼は生れつき、精力絶倫の體

軀を授かつて居ました。

彼はあまり眠をこる事をしませんでした。それもほんの僅でした。そして随時に、快よい眠に入るこゝが出来ました。

その代り食べる事も食べました。「大食漢 釜不足」の方でした。その猛烈な働は彼に並々ならぬ食欲を與へました。彼は腹が減るこゝ、時々所々を嫌はず、遠慮無しに食事をこりました。

ゴス博士はこんな事を記して居ます——

「或晩ムーデー氏はその烈しい勤勞の後私の宅へ飛び込んで来て、大聲で

「何か食べ物をくれ給へ」ミ怒鳴つた。

そこで直ちに豚肉ミ豆ミを山盛りにした大皿が彼の前に置かれた。するこ彼は至極短い祈禱の後、一言も物を言はないで綺麗にそれを平らげてしまつた。それも目にもこまらぬ早業で……」

しかしさうか言つて彼は野獸のやうにガツガツ食ふ様なこゝちはありませんでした。彼はたゞ食べる時には専念に食べたこゝふだけでありました。私はかうしたムーデーを想ふ毎に、額に太い筋までたて、食事に精を出してゐた十八世紀の博士ジョンソンを再び想ひ起さずには居られません。

恐らくムーデーとジョンソン博士との間には、その巨大なる體軀からしてか、非常な類似を示して居るを考へられます。

凡そ健康その物を誇るのには愚な事です。健康で、盛んに窃盗をし、盛んに放蕩するのでは却つて困り者です。しかし健康が正しい目的の爲に用ひられる時、それは尊いものになります。恐らくムーデーのあの明るい、晴れ々とした樂天主義は、比類なき彼の健康に根ざしてゐるのかも知れません！

エマーソンの言葉――

「我に健康ミ日子ミを與へよ、我は世の帝王の群をも嘲笑するを得む」………

さしづめムーデーの生涯にはエマーソンの言葉がしつくりと當て嵌まります。

子供の友

ムーデーの説教をよむ毎に、わたしが一番愉快に思ふのは、その中に子供の事が澤山出て來るこゝにであります。實際彼の説教のなかでは、子供たちが盛んに活躍して居ます。いたすらもして居れば、時にはいさかきもして居ます。笑つても居れば、泣いても居る。ダンスもして居ます。飛んで居ます。跳ねて居ます。それで居てみんな神からの祝福を樂しんで居るのです。ムーデーは自分の子供たちの事計り説教の中で語つて居るのではありません。いろ／＼な子供のこゝをも物語つて居ます。それも手短かに、物語つて居るのです。彼が説教のなかに、斯く多く、子供を持つて來るのは、一つには彼が稀に見るほどの子供黨であつたせいもあります。今一つは子供と云ふものが最もよく彼の説かんとするいと善き信仰的態度を現してゐるからで

ある思ひます。

何にしても、かれの説教に子供の活躍することは、彼の説教を世の常になく明らるるものにして爽快なものにします。そして幼稚園の子供が話上手な先生の話を聞くやうな心易さで私共もムーデーの説教を聞くこゝが出来るのであります。

一例をあげて見ませうか――

「この間、私はエンマ（私の娘）に人形を買つてやらうと思つて、玩具店へつれて行つてやりました。無論その時、私は可成り良いものを買つてやるつもりで居たのでした。そしてあれこれいゝ品物を出させて、どれがいゝか彼女にたづねたのですが、エンマはさうしたいゝ人形より店先に並べてあつた安つほいのに釣りこまれて、さうしてもそれを買つてくれと言つて聴かないものですから、私は仕方なく白銅一つで、それを買つて與へました。

するこももう翌る日には彼女は人形がいやになつてしまつたのでした。そしてついで、のを買つてくれと言つて切りに私にせがみました。

そこで私は言つたのです。

「だつてお前は自分の好きなものを買つたぢやないか？……」と。

するとエンマは唇を噛んでだまつてしまひました。

そして、それ以後は自分の方から「あれを買つてくれ、これを買つてくれ」は言はなくなりました。

丁度そのやうに私共も何事に拘らず自分でえらぶこゝをしないで、神のお與へ下さるものを有難くいたゞく様に心がけやうではありませんか！

.....

かく説教のうちに縦横無盡に子供たちが出て来るこゝろを見ると、ムーデー自身余程の子供好きであつたに相違ありません。事實、彼は大の子供黨でした。

彼が手招きをすると、子供たちは飛びかゝつて抱かれました。彼の周囲にはいつも子供の群があり無邪氣な笑がありました。彼はさながらバイド・バイバーでありました。

彼は一度だつて、その集會に子供を否んだ事はありませんでした。成程子供がガヤ／＼すれば大いに説教の邪魔になつたかも知れませんが、しかしムーデーにまつては、父母ミミも／＼祈る

子供の姿は天使のそれのやうにすら思へたのであります。

かうした場合、ムーデーは子供をあやす事が大層上手でした。

或る集會の時、一人の腕白が會衆席の一番前のところへ陣取つて盛んに悪戯をやるので、皆困りぬいて居ました。するにムーデーは會場へ入るなり、その子に目をつけて、ツカツカミ子供に進み寄り、自分の帽子を手渡しながら言つた。

「坊や、話の間だけ此帽子をお前にあづけておく。大事に番をして下さい」
すると、くだんの腕白も、余程の光榮に感じたものに見えてまるで、寶の箱でも捧けてゐるやうな姿で、もの、二時間も、側目もふらずに説教を傾聴して居たさうです。

ムーデーの子供の心理を掴むことの巧妙さ！鮮かさ！童心のある人にしてはじめて出来る事であります。

家 庭

彼は妻に對しては實に親切な、善い夫でした。

彼は心から妻を愛すると共に敬意を拂つて居ました。彼はその妻が彼自身の仕事をすら、彼より旨く遣り終せる腕前のあるこゝさへも公言して居ます。

子供たちに對しては此上なく良い父でした。彼は自分の子供を熱愛しました。そして出来るだけ彼らを善導して、神の國の爲めに何等かの寄與貢獻の出来るやうな人物にしたいと云ふのが彼の希望でした。

.....
彼が臨終の時、子供達に與へた言葉——

「自分はお前方に一ペニーの金も残しはしない。たゞ残し置くものは永遠の希望——かぎりなき奉仕の力！それだけだ」

そのとほり、ムーデーは「子孫の爲に美田を買はざる潔い」人でした。

下僕らに對しても、善良な主人でした。

彼は自分自身が神の下僕であり、同時に人のしもべであることを痛感して居ました。そしてかゝる心持で己が下僕らに對しました。彼こそほんたうの意味での温情主義者でありました。

一指を舉げて

凡そ世にムーデー程人の顔を忘れない人——そして名前をよく覚えてゐる人は少ないでしょう。そして彼は街頭の行きなりに、一面識の者に出會ふ毎に、右手の一指を舉げて、ニツコリ挨拶を投げました。これは彼獨特のジェスチュアでしたが、それがまたなく懐しいものでした。彼の舉げた一指は天を指して居ました。それと共に、彼が呼びかける對手の靈魂をも天に舉げるだけの力ミ好意ミの籠つたものでした！



(挨拶のムーデー) 一指を指し

彼ほど博大な愛を湛へた心の持主は少ないでありませう！前にものべたやうに彼の前には貧もなく富もなく、階級の差別は斷然徹廢されました。彼はあらゆるところに於てあらゆる人に同じ博大な好意を惜みなく與へました。

こんな話もあります。

——彼がイギリス大傳道を初めた頃、或る晩一人の貴族に紹介されました。するさムーデーはいたつて無雜作に

「ヤア、始めてお目にかゝります。時にあそこに立つて居る二人の老人がありますね。あの二人に椅子を二脚持つて行つてあげて下さいませんか」
ムーデーならでは、アメリカ魂ならではと思はれるやうな痛快味があります。

博大な同情

誰か、リントンコルンの事を評して「ロッキーマン山から切り出した岩に涙を持たせたやうな人物」
と申しました。この言葉は直ちにムーデーの優しい心にも適用するこゝが出来ます。またその
昔、ゴールド・スマイスはその友ジョンソン博士について「あの男は熊の様な様子をして居るが
心は柔和な羊だ」と申しました。或は此の方がよりよくムーデーの場合に當て嵌まつて居るか
も知れません。ムーデーの外見はすつかり熊のやうでした。しかしその傷み易い、同情に溢れ
た靈魂の美しさは譬へるこゝばもない程でした。

ゴス博士は言つて居ます。

「ムーデーのすべての生物に對する深甚なる同情を想ふべき、彼をしる程の者は涙せざるを得
ない。馬—犬—牛—その他の動物—そして鳥—すべてのものは彼の同情を惹くのに充分であつ
た。殊に人間社會に於ては如何なる階級を問はず苦しめる人々は彼の同情を呼んだ」——

.....

ムーデーの家の扉は誰に向つても大きく開かれて居ました。いつ如何なる時に於ても彼は人
の訪問を歓迎しました。そして、その態度は心からなる温さで丁寧さの溢れたものでした。

彼は見しらぬ人々と初對面の挨拶をするや否や

「さあ一所に食事をしましょう」

「今晚はゆつくり僕の家で憩んでいらつしやい」と言つて人々を慰めました。

ですから、彼の家はいつでもお客の絶え間がなく、その食卓はいつも満員でした。ムーデー
にまつては彼の家も、彼のテーブルも、また彼の食卓も自分だけのものではありませんでした。
それは同時に他人のものでした。彼は自分に屬する何物をも他人のために提供して悔ゆるこゝ
ろがありませんでした。

或る朝ムーデーは自分の書齋にこもつて、何物にもさまたけられない静けさのなかで、しき
りに聖書の研究をして居ました。その時、ふと窓の外をみるに、一人の青年が、恐らく何かの
集會を終つて、ありましよう、手に餘るほどの大きな包を重さうにもつて、ステーションへ急
いで居るのが目に入りました。ムーデーはしばらく聖書の研究をつゞけて居ましたが——その
青年のこゝろが氣になつて仕方がありません——やをら立つて馬小屋に行き、馬車をひき出して

自分でたづなをこり、大急ぎで青年に追つきました。そして事の意外にあきれて居る青年の腕を大きな掌で握つて有無を言はせず馬車にのせて、まつしぐらにステーションまで送つてやりました。

いかにもこの偉大なる「熊さん」の温かい心情をよく現した逸話ではありませんか！

明るき哄笑

ムーデーは明るい、陰影のないこみが好きでした。彼の信仰も、彼の人生観も、彼の笑もすべては開けつ放しの、日當りのいゝもの計りでした。

彼は或る意味に於てユーモリストであり、笑の祝福をよく識つて居る人でしたが、彼は上品な笑や、微笑や、乃至、微笑を好みませんでした。彼は憂鬱のない笑を好みました。その點はチャップリンなどの齷らす笑は余程性質を異にして居ます。リンコルンのこも違つて居るま

す。ラムのこも違つて居ます。彼らの笑は深い、憤のしがたい憂愁を紛らはす爲の笑であり、涙痕の跡さだかなる笑であります。これをしも本當のユーモアと言ふのならば、ムーデーの笑は全然類型を異にしたものです。

ムーデーはただ、世の中が愉快で、愉快で堪らなくて笑つて居るのであります。お母さんから「お八つ」を貰つたときの子供の頑是ない笑に似て居るのであります。それにしても

ムーデーを圍む夜の團樂の楽しさはどうであつたでしょう！そこには絶えざる哄笑の波がありました。みんなはわけも無しにその波に身を浮べました。そして子供に立ち歸りました。しかしムーデーだけが、いつも笑はせ役ではありませんでした。彼は他の人々にも思ふ存分心をのびくさせ、くつろがせ、話させましたのでした。

それにムーデーは珍しいほど話上手な人でした。彼はその豊富な話の庫から、いくらでも、いくらでも話の種になる道化役者をひき出しました。それが皆ひよつここのやうな、びりけんのやうな顔をした小人計りでした。

彼の冗談交りの話を聞いてゐては、いかな四角四面の君子人も吹き出さずには居られなかつ

た言ひます。

ステビン博士は次ぎのやうな興味ある光景についてしるしてゐます——
「わたくしは今猶ほ鮮かに憶えてゐる——その日は面白い話が、穂に穂をついで起つて来た。さあ可笑くて、おかしくて仕方がない。たうとうそこに居た、まらず座を外したい位であつた。サンキー氏は見るに、これも堪らなくなつたものを見て、部屋の隅の所へ行き頭を両手で抱えるやうにして窓のところで笑つて居る。私は私で反對の隅のころへ行つて同じ所作をしなければならなかつた」云々。

あの頼髯の美しい立派な紳士のサンキーが、海老のやうに身體を曲げて笑ひくづれてゐる姿を想像するに、私共さへほゝゑみを禁じ得ないではありませんか！

彼の關心は靈魂の救のみ

彼ほど純粹な救拯主義者は多くないと思ひます。彼の關心はたゞ一つでも多くの靈魂が救はれることでした。彼は一つの靈魂が救に導かれる爲めには彼自身の全生涯を投じても悔ゆるところがなかつた云々——徹底した覺悟の傳道者でした。其他の善事は、これにたくらべては物數ではなかつた様です。彼はジョンソン博士と共に人間結局は自己の靈魂の幸福以外には第一義的に考へるものを持たない云々ことを信じ切つて居たのであります。

第一に政治に對して彼は無關心でした。勿論彼は愛國者でした。その意味からして彼は予言者ダニエルを推獎して居ました。

「ダニエルは神を愛するのみならず、國をも愛した。私にまつて祖國を愛する人ほど快いものはない」云々。しかし、さうか言つて彼は何んの政黨に加擔するでもなく、何らの政治運動にも興味を持ちませんでした。この點に於ては他の大宗教育家テオドル・パークーやファイリツプス・ブルックスや・エドワード・ヘイルや、ヘンリー・ワード・ビーチや違つて居ます。

しかし一方から考へれば彼の心靈運動をして、しかく大成功を博せしめたのは恐らく彼の政治的無關心が與つて力があつたのかも知れませんか！

.....

廣い意味の社會事業に對しても彼はさして興味を感じて居なかつた様子です。

例へば禁酒の問題ですが、勿論彼自身厳格な禁酒實行者ではありましたが、彼は禁酒福音を轉倒するやうな事はしませんでした。禁酒も大切なことには相違ないのですが、ムーデーにまつては救靈の事業には到底くらぶべくもない小さな問題でした。

此點に於て彼はフランセス・ウイラーどなき、は余程違つて居ます。二人は能ふ範圍に於ては協同戦を張りました。しかしウイラーの初一念は禁酒實行にありムーデーの初一念は福音宣傳にありましたので、その本領に於て低觸するに於ては斷然袂別を辭しませんでした。ウイラーにまつてムーデーの正統信仰の短衣はあまりに窮屈でした。ムーデーにまつてはウイラーがキリストの神性を信じない人々と共に運動をしてゐるのを、あまりにも放縱自由な見地を解しました。遂に二人の歩む道は會ふ様で會はざる並行線でした。

彼の終末的世界觀

然し更に深く考へて見るに、かゝる社會的政治的無關心の由つて來る源は遙かに遠いものがあるのでありまして、實にそれは、彼自身の抱懐してゐる終末的信仰に在るに云つていゝと思ひます。彼はキリストの俄然的再臨の熱烈強固な信仰者であつたのであります。主は來り給ふ。遠からず——否——必ず近き將來に於て再臨し給ふ。その時に救の完成があり、新しい世界秩序の再建がある——この莊嚴なるヴィジョンに對しては、屑々たる社會改造、政治更新何するものぞ！と云つた、信仰的見地から彼の無關心が生れ出でたことこそ少なくも私自身は信じて居るのであります。

靈魂の獵人

七二

ムーデーは實に巧妙な、周到な且つ親切な、「靈魂の獵人」でした。彼の常に標的とするところは、群衆ではなくして一人でした。一つの靈魂でした。彼は幾千の大會衆に向つて語る時にも、そのなかの或る一つの靈魂に向つて話しかけて居たのでありました。

彼は群衆の動に信頼をおきませんでした。

群衆心理に支配されることを常にさけて居ました。彼の努力は、どうかして救はるべき一つの靈魂を發見したいと云ふ事に集中されて居たのであります。彼は話しつばなしをしませんでした。彼の勸話によつて心動いた人に對しては、彼は、まづその鋭い眼光で、その心のなかにある問題を洞察し、暖かく大きい手で對手の腕を同時に擱んでキリストの臺前にまで導く事を忘れませんでした。

彼は、あらゆる集會の後に必ず小さな部屋で懇談會を開きました。それも一人づつ、――求道者の一人々々親しく會つて、對手の心の問題をきくのでした。一人一人――こゝに最大の傳道が行はれる事をムーデーは確信して居ました。

「箇人的引見は最も重要なことである。たゞ福音の宣傳のみで、その後に箇人的接觸で以つてその繼續をしないことに由つて、どれ程多くのたましひが失はれたことであるだらう！ 凡そ牧師の説教によつて救はるゝものは少い。たゞ箇人的引見のみが人を神にまでみちびく。これは彼自身の證言であります。

傳道に對する白熱

「斯くてイエス周圍に座する人々を見回して言ひ給ふ」――（マルコ三の三四）。ムーデーも常

七三

に周囲を見回して居ました。彼は非常な熱心を以つて救はるべき靈魂を探して居たのです。彼の眼はいつも獵人の眼でした。

その傳道に對する白熱は驚くの外はありません。

彼はその未だ若かりし頃、次ぎの様な生活の規箴を作つたさうです。

「私はどんなことがあつても、毎日、誰かに救のこゝを傳へよう！彼らが外の人々から福音の物語を聞くことがないにしても、私の口からは一年に三百六十回福音を聞くやうにしたい」

この決心は文字通り寸分の違なく、實行されました。

彼は會ふ人毎に「君はクリスチャンですか」と紋切形な挨拶を投げるのでしたが、彼は決して思慮無しにこの言葉を言つてゐるのではありませんでした。

そこには常に深い用意があつて、適當な時に、適當な人に向つて適當に投げられた、好意にみちた網であつたのです。彼の眼が一つの迷へるたましひをみとめた時、彼は用心ぶかくそ

れに近づき、又充分その要求を知り抜いて對しました。そしてその靈魂を掴みました。

彼はたましひの名醫であつたと思ひます。名醫になると一見ただで全體の症狀が解ると云ひますが、ムーデーも、さうした眼光を與へられてゐました。彼には一人一人の靈魂の症狀がすぐ分つてゐました。そしてそれに對して適切な對症療法を施しました。

高慢が鼻先にぶら下がつてゐるやうな者に對しては、無遠慮とも考へられるほどの拳固でボキリとそれを折つてしまひました。

或る地位のある婦人が大痛棒を喰つて

「私は今までにこんなひどい事を言はれた事はない」ミつぶやいた時、ムーデーは落ち着き拂つて、

「だから誰かに今言はれなければならぬ時期になつたのです！」

とやつつけました。中々どうして、植村正久先生はだしのピリツミする痛棒を時々喰はせたも

のらしいです。

.....

彼は理窟の罐詰のやうになつてゐる頭には情感の針で穴を明けてやりました。パスカルの所謂「理性以上の理性」は形而上的な意義でなく、實際的な意義に於て、ムーデーによつてよく用ひられました。

變な、小ざかしい理窟の舟は大きな靈魂のうねりに會ふにたまりもなく破船してしまふものです！

.....

何んきな不安にかられて、とやかくためらひ、たゆたつてゐる靈魂に對しては、ムーデーは單兵急に、權威を以つてのぞみました。

一例をあげて見ます、或る日

一人の青年が彼を訪づれて來て、

「私は信じ度いのだが、どうしても信じられません」

と訴へました。

するとムーデーは直接それには答へないで

「ヨハネ傳五章二十四節を聲を立て、讀んで御覽」と言ひました。

そこには

「誠。に。汝。ら。に。告。ぐ。わ。が。言。を。き。て。我。を。遣。し。給。ひ。し。者。を。信。ず。る。人。は。永。遠。の。生。命。を。も。ち。か。つ。審。判。に。至。ら。ず。死。よ。り。生。命。に。移。れ。る。な。り。」——と、ありました。

青年はそれを朗讀しました。するとムーデーは

「も一度」と命じます。青年はもう一度よみました。

するとムーデーは

「もう一度」を繰り返すのです。

青年は三度同じ聖句をよみました。讀んでゆく中に彼の心のなかに靈感が沸々湧き出て來るのを感じました。

するとムーデーは語調を和らげてしづかに

「君は信じますか？」とたづねました。

青年は言下に

「信じます、信じます！」と告白して、湧きくる感激の涙をハンケチで抑へました。

それ以後この青年の心には再び懷疑の雲はかゝらなかつた云ふことです！

神業の鮮やかさ！、そしてその讶え！驚く外はありません。

しかし彼の用ひた最大の武器は愛でした。イエスの教訓——イエスの恩恵を想ふとき、おのづから泉の如く湧き出づる愛そのものによつて、彼は人々の靈魂を神に導いたのであります！

イエスの愛に勵まされる時、むくつけき彼の手はさながらに天使の癒の手でありました。觸るゝ靈魂は悉く祝福をうけました。

.....

彼はほんたうに他人の立場になり切ることが出来ました。これ亦イエスより受けた、ゆたかな愛の結果であります。他人の思想、他人の當惑、他人の煩悶、他人の感情、他人の生活、他

人の病苦が悉く我がものゝ如く感ぜられました。それは丁度パウロと同じでありました彼は言つて居ます。

「われらにして人に近づくかとするならば、彼らをしてわれ／＼がその兄弟であると言ふことを感ぜしめなければならぬ。さうなるのには、どうすればいゝか？

それは彼らの立場になり切る事だ。もし、われわれにして、それが出来たならば、必ず人をキリストに導くことが出来る」云々。

その通り彼は實行しました。

.....

ですから傳道に際して彼が最も務めた準備は祈りでした。愛の増さんが爲の祈りでした。神わざの行はれんが爲めの祈りでした。

ムーデーは箇人傳道の秘訣について次ぎの様に言つて居ます。

「未だ救はれて居ない人々話す時には、出来るだけ平易な、くだけた言葉を用ひるが宜しい。私は度々次のやうな順序で話して聞かせることがある.....

「お出で」と云ふ語は恐らく世の母云ふ母が始めてその子に呼びかける言葉でありませう。母がどうかして子供を歩かせ度いと思ふ時には、子供を椅子の傍に置き少し離れて「いらつしやい」と言ふ。するにその聲に應じて可愛い子供は椅子のまゝを離れて、危ない足どりで母のところまでたどりつくのである。これが即ち「お出で」又は「いらつしやい」の意味なのである。君が聖者として神の前に來るこゝが出来なければ、罪人として宜しい。こゝに角「いらつしやい。若しも主の聖前に出づるにふさはしからずこゝろから思ふ時があつても、神はそのままの君を要求して居られるのだから、少しも遠慮はいらぬ。神は必ず君の頑な心を和らげて下さるであらう！。若しも君にして人生の途上に倦み疲れてゐるやうであつたら、キリストの前にいらつしやい。主は必ず君にめぐみ憐憫を與へ賜ふであらう」

大統領ウイルソンの證言

大統領ウイルソンが未だその榮職につかない頃のこゝに、彼はふと理髪屋に於てムーデーに出喰はしたこゝがあります。尤も當時双方とも顔馴染と云ふわけでもなく、別に挨拶も交す程のこゝはなかつたのでしようが、ウイルソンはムーデーの舉動に對して特別の興味をもつて傍觀して居ました。するにムーデーはその獨特の切り出し方で福音宣傳を初めました。それが決して理窟つほいものではなく、いかにも自然で、いかにも單純で、いかにも親しみ深いもので、理髪屋の者共は覺えず、仕事をしながら、ムーデーの話に聞き入つたさうです。ウイルソン自身も覺えず耳を傾けて聞いてゐるうちに、實に心持になつたと言つて居ます。やがてムーデーは、金を拂つて、清水のやうに爽快な挨拶をのこして店を立ち去りましたが、ウイルソンは好奇心から、果してムーデーの傳道の與へた印象がどうであらうか、なほしばらく店頭に居残つて觀察をつゞけました。するに驚ろいた事には理髪師たちの心には、たゞならぬ變動が起つたらしく、みんなが聲をひそめて、自分の靈魂の問題についてしみじみ語り合つて居た云ふのです。勿論彼らはいまの客がムーデーであつたこゝは露しらないのです。

ウイルソン氏は今更ながらムーデーの把握力の強さに驚嘆したと云ふこゝであります……

して見るミューデーのかりそめの訪問も、丁度燈火のやうに、人の心の闇をてらすものであつたのです。

街燈の下にて

ある夜——それも夜更けてから——最早や寝しづまつた夜の街を、靴音をたて、ミューデーが歸つて來ますミ、惶々ミかゞやく街燈の下にシヨンボリたゝすんでゐる人影がありました。

その日は未だ一度も

「君はクリスチャンですか」を誰に向つてもかけなかつたので、その人の側に近づいて、

「君はクリスチャンですか」ミ話しかけました。しかし、その時その男の靈魂の扉はさびついで居ました。そして、彼は唾でもひつかけまじき勢で

「馬鹿野郎！」ミ怒鳴り返しました。

しかしミューデーはなほもほゝゑみをつゞけながら、熱心に短い勸告をして家路につきました。ミところが、その事があつてから、しばらくたつて、霜氷る深夜のミューデーの戸を割るやうに叩く者があります。出て行つて見るミ件の男です。

その時にはもう既にその男の心は準備されて居ました。ミューデーの語るわづかな、焔の言葉は彼をして己が罪に泣いて神の前に跪つかしめました。

雨傘の下にて

また或る時は、夕立に會つて當惑したミューデーを傘をもつた一人の男が親切にもさし招いて雨宿りをさせました。濡れ鼠のやうになつたミューデーは、早速傘の下に躍り込むなり、彼の發した最初のこゝろばは

「地獄の嵐はどうして避けたらよからうか」ミ云ふのでした。しばしの後、ミューデーは雨傘の

下で一つの悔改めた靈魂を收獲しました。
それにしてもその男が、呼び込んだ熊のやうな大男はさしづめ彼にミつての天使だったので
す！

歡喜の記録

「ムーデーに導かれて主を識るにいたつた一青年が己がうけた救の經驗について次ぎのやうに
書きしるして居ます。

「私が初めムーデー氏の説教を聞きに行つたのは、全く好奇心からだけでした。する之間もな
く心に惱を覚え始めました。やがて居た、まらない様な心持になりました。ムーデー氏は私
だけを大勢の中から指さして、私に語り、私の罪を數へ、私に改悔を迫つて居るではあり
ませんか！

私はそれが堪らなくいやでした。私は自分の周圍のものが私に皆目を向けてゐるやうな氣が
して頭をあげる事さへ出来ませんでした。

若しも私が出口の近くにでも居たならば、直ぐにでも飛び出してしまつた事だつたでしょう。
次第に私ははづかしくなりました。そしてどうかして彼の話を耳に入れまいとしましたが、
ムーデー氏はそれに頓着なくどんどん話をすゝめて行くのです！そして私よりもつと悪人が
あるにかゝはらず、私だけに目をこめて話して行くのです！

私はもう居ても立つても居られなくなりました。その時ムーデー氏は急に話をやめて、みん
なに、

「たふさきわが友 エスキリストは

つみさがうれひを ミりさりたまふ

こゝろのなげきを つゝますのべて

などかはおろさぬ おへるおもにを」

(讚美歌二百四十三番)

を歌ふやうに願ひました。

その大濤のやうな歌声は私を揺り上げ揺り上げ、演壇の前にまで導いて、そこに跪つかせてしまひました。涙は止め度もなく私の頬を傳ひました。

するミムデー氏はその温かい大きな手で私の手をしつかり握つて、

「若しほんたうに罪を悔改めて、主イエスに順ひまつるならば、必ず救はれる」ミ力をこめてすゝめてくれました。

私はその時、

「さうしたらば救はれてゐるこゝが確かめられるでしょうか？……そしてどんな證據を與へられるでしょうか」とおつたつねました。

するミムデー氏はジツミ私を見つめて居ましたが、

(その眼も彼獨特なものでした)

「あなたの心がよく話してくれます」ミ、おだやかに同情深く言つてくれました。

あゝこの瞬間こそ、私の生涯に於て、またミなき貴い時であつたのです——

.....

勿論ミムデーの傳道がその功を奏せなかつた例も澤山あるこゝでしよう！しかし、彼によつてかくの如くよろこばしい更生を経験した靈魂の数は更に多かつたこゝを私は疑はないのであります。

.....

かうした救を得た時、その人の喜は言を待たないのでありますが、そのたましひを主に導くこゝの出來たミムデー自身のよろこびも亦大きいものであつたと思ひます。

事實、ミムデーには他の何んの野心もありませんでした。他の何んの歡喜もありませんでした。あゝ、彼のたゞ一つの野心は——そして彼のたゞ一つの歡喜は、救はるべき靈魂を發見するこゝでした。

彼は言つて居ます。——

「たましひをキリストに導くこそ最も大きなよろこびである。これは又天使すらも楽しむこゝの出來ない、こよないよろこびである」ミ。

あゝムーデーはみ空にきらめく星とならんよりは、また山嶺にかゞやく神火ミならんよりは、幽暗な人生の谷間をてらす、小さな燈火ミなるこゝを願つてゐたのです。「かゝる燈火よ、出でよ」です！

意志に、そして、實行に

ムーデーは心のどこに向つて訴へたでしようか？ 感情にはありませんでした。理智に向つてもありませんでした。たゞ意志に向つて訴へました。

人の意志をして神の前に跪つかしめる——これが彼の傳道の主眼でした。

彼は言つて居ます。

「悔改は人が「そうします」ミふるひ起つ時に行はれる。それは正しく意志の承服である。屢々人をして跪つかしめる事によつて意志の承服に成功するこゝもあるが、大底の場合は、跪

づく前に意志がすでに承服してゐる場合が多い。だから意志に向つて呼びかけ、話しかけるこゝが大切だ」こゝ。

かく悔改が意志の承服であるミすれば、ムーデーによりて爲される回心は甚だ實行性の強いものミならなければなりません。些の低迷を許しません。長い情感の氾濫をゆるしません。直ちにそれは實行に翻譯されなければなりません。仲違をしてゐるものは握手しなければなりません。人に對して罪を犯してゐるものは両手をついて謝らなければなりません。悪癖は矯正されなければなりません。悪趣味はふり落されなければなりません。悪友ミは絶縁しなければなりません。悪い職業とは手を切らなければなりません。……

ラテン的——

私共はムーデーのこゝにもケルト的、夢幻的、情緒的な要素を見出すこゝは出来ません。

彼の健康は（肉體的にも精神的にも）夢を許しませんでした。

聖フランシスには吟遊詩人の風格がありました。

美しい「白日の夢」もありました。しかし、ムーデーにはたゞ爛々たる眞晝の太陽も、坦々としてつゞくシオンへの一路があるのみでありました。鳥も、月も、雨も、木の葉も風の忍び音も……彼にまつては問題ではありませんでした。

残されし一つの疑問

ここに私にまつて残されし一つの疑問があります。それは外でもありません。

ムーデーは、自分が救に導いた人達を其後どうして長く指導し激励するこゝが出来たであらうか？ ミ云ふ疑問です。恐らく彼はそれらの人々を、信頼するに足る人の指導にゆだねたのかも知れません。それに彼は決して手紙を多く書く人ではなかつたやうですから、或はその

隙さへも見出し得ない程に多忙であつたのかも知れません。——しかし彼に導かれた人たちは矢張り、どうかしてムーデーの親しい指導をのぞんで居たこゝであつたでしょう！

或るフランスの高僧が言つたこゝがあります。

「善き忠告

善きヒューモア

そして

善き手紙」

ミ。同じ靈的指導者でもフェネロンやフランシス・ド・サールなどには、それはそれはいい、書簡集があります。こちらの信仰ミそして心境とを知りつくした人から、時折りあゝした親愛の情のこもつた、しかも心の問題に適度にふれた善い手紙を貰つた人はいかに幸福であるでしょう！

私はわれらの偉大なるムーデーをして、もう少し勤勉な書簡作者であらしめたかつたミ云ふ感を禁じ得ないものであります。しかしこれも或は璫を得て蜀を望むの類かも知れません！

彼の後に來る者（ヘンリー、アーサー、スタントン等）

ロバートソン・ニコルの美しい傳記を書いたダートロウは、その書中ムーデーを

「第十九世紀に於ける最も非利己的な、そして同情の博大な傳道者」

と評して居ります。適評と思ひます。凡そ彼ほど宗派的根性から超越した人はありませんで、ミ評して居ります。適評と思ひます。凡そ彼ほど宗派的根性から超越した人はありませんでした。彼は最良の普公主義、最良の新教主義との間には零細相通するものがあることを信じて居た人でした。故に彼の説教はたゞに新教の社會のみならず舊教の人々にも歓迎されました。彼は故郷ノースフィールドに舊教の會堂が建設される爲に最大の盡力を惜しまなかつた人でした。故に彼の靈的大運動は宗派の垣を超えて各方面に甚大な刺激獎勵を與へたものでした。従つて彼の足跡を追ふ人々がいろいろな方面から輩出しました。

アメリカに於けるトーレー博士を始め、彼の重なる助手達は勿論のこと、スコットランドに

於てはあの偉大なるヘンリー・ドラモンドが非常なる共鳴を感じて、彼の運動に参加し、その獨特なる學識、人を魅了せずにはおかない人格によつて數千の平信徒傳道者を生み出しました。

ムーデーがいかにもドラモンドに敬愛の情を傾けて居たかは、彼の死一度傳はるや、折ふし、食卓についてゐたムーデーがナイフでフォークをそこに投じて大聲をあげて、子供の様に號泣したのもわかります。彼は啜り泣のうちに

「ドラモンドは、私の知つて居る人々のうちで一番キリストに近い人格者であつた。私は彼のどこにも缺點を見出す事が出来ない」を繰り返し繰り返し言ひました。

.....

それからラブラドルの傳道醫グレンフェル博士もムーデーによつて勵まされた一人でした。グレンフェル博士がムーデーに惹きつけられた動機が實に面白いのです。

——或る日、グレンフェルは、ロンドンに於けるムーデーの集會に何心無く顔を出しました。するををりふし、一人の年老いた牧師が長つたらしい祈禱をいつまでもいつまでもつゞけて居

ました。するミムデーは堪らなくなつた見えて、サツサミ演壇に近づき、大聲で、「諸君、
ジョーン君が祈つて居る間に、サア、一つ皆なで讃美歌を歌はふではありませんか」ミ怒鳴つ
た………グレンフェルはその時感じたさうです。

「成程、たしかに面白いところがあるゾ」ミ。

かくて彼はこの運動に加はつたのであります。

しかし、それよりも私にミつて興味ある事實は、このムーデーの純福音的精神が英國の國教
會——殊に所謂オックスフォード運動の繼承である高教會派に浸入して、實に愉快なる成果を
見るに到つた事でありませぬ。——彼らは所謂普公的福音主義の人々でありまして、その装は
異にしても、その強調するところは最良のクリスチャンのみが把握し得た古今に通じて誤まる
ことなき福音の原理であつたのでした。故に

彼らは非常な誤解を受けました。従つて非常な迫害をも受けました。しかし彼らは一切の榮
達をすて、顧みることもなく、貧民の友となり、世に捨てられし人々の父ともなり兄ともなつて
その全生涯を送つた人々でありました。

最近イギリスの有名な新聞記者エイチ・ダブルユ・ネヴィンソン氏は、その興味ある著書
「英國民」のうちに於て、

——最近五十年間に國教會が俄然として勢力を加へるに到つた所以は、その選良が自ら甘ん
じて貧民の群に入り、その生涯を投じた大いなる犠牲的精神に由るころが多い——
ミ云つてゐます。

かゝる群のなかには、カノン・ビーチングがあります。エイトキン博士があります。監督ウ
イルキンソンがあります。殊に最も卓越した傳道者はアーサー・ヘンリー・スタントン師であり
ました。

かのロバートソン・ニコル博士の讃辭を待たずともスタントン師が最も熱心なるムーデーの
共鳴者であり、且つ近代英國に於ける最も有力な福音的説教家であつたことは彼の手紙や説教
を読んで見れば明白に分ります。彼はムーデーの大集會に出席の後、その心友に與へた手紙の
うちに、ムーデーを極力稱讚して、

「我らが群に屬せざれども、いミ聖き人物、驚くべく能力ある大傳道者」ミ記して居ます。

.....
 試みに私ごもがラッセル氏の編した「スタントン説教集」をよむと、いかにスタントンが説教家としてムーデーの最も善き繼承者であつたか、分かります。その温情、その熱意、その直截、その迫力、その健全さ、その聖書的なこと——すべてに於て、スタントンの説教はムーデーのその延長であることを思はせられます。たゞ、しかし、スタントンの説教には一味飄渺として詩情が漂ふて居ることだけが違つて居るかも知れません！

.....
 かくあらゆる方面に有力な追従者を輩出したことは、たまたま以つてムーデーの襟度の廣さを證明するものも考へられるのであります。彼が「第十九世紀に於ける尤も非利己的な大傳道者」を稱へらるゝのも宜なる哉です！

彼の自叙傳

——嘗て彼は短い自叙傳を書きました。次の如くであります。

「——いつの時か諸君は東ノースフィールドのデイ・エル・ムーデーが死んだと云ふ報知を新聞でよまれることがあらう！しかし、それを信じてはなりません。その時こそ私は今在るよりも更に活々として存在して居るのであるから。……私は更に高きへのほるだけであるのだ。この老いたる肉體から離れて、永遠の住家に入るだけであるのだ——即ち死もふれることを許さない、そして、罪も汚すことのない靈體になるのである。それは主の榮光の聖體の様に形づくられるのである。

私は西暦千八百三十七年に肉の誕生をした。そして西暦千八百五十六年靈の誕生をした。肉によりて生るゝものは死ななければならぬ。しかし靈によりて生るゝものは限なく活き

る」

.....
何んたる短い自叙傳でありませう！ しかも何んたるか、やかしい文字でありませうか！
雄渾そのものであり、靈感そのものではありませんか！

結 語

私は拙なき筆を、こゝにとゞめることにいたします。終に私は、現代及び後代に脈々として
ムーデー魂の傳へられむことを祈りつゝ、彼が喜び、サンキーが愛した讚美歌の一ふし二ふ
しを讀者諸氏と共に歌ひ度いと存じます。

一、九十九のひつじは をりにあれど

ひつじはまよひて のやまにあり

よきひつじかひの

みまもりをはなれて

一、「主よ九十九あらば よしとせすや」

「いなきまよひしも わがものなり

みちけはしくとも

われはゆきてもとめん」

三、こほくもこめゆき やまかはすぎ

ひくるもやめず よびてたづぬ

うめきよばふいぬ

はるかにぞきいぬる

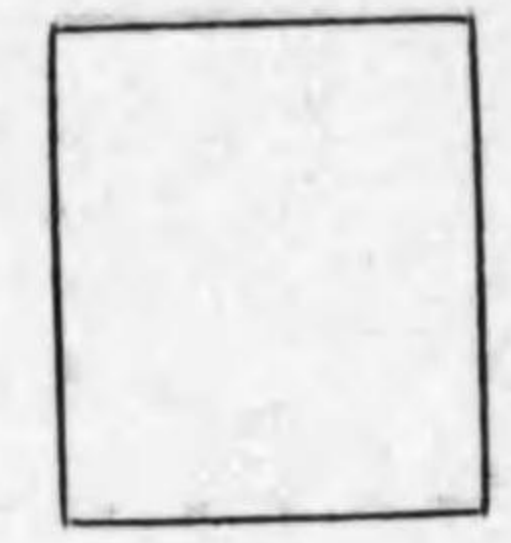
四、「うれしわがひつじ こゝにあり」

みやまのおくにて さげびたまふ

みつかひもてんにて
よろこびつゝうたふ……………。

(完)

大傳道者ムーデー終



昭和五年八月一日印刷
昭和五年八月十日發行
昭和十二年九月一日再版

〔大傳道者ムーデー〕

定價金拾八錢

送料四錢

著者 鈴木二郎

編輯兼 大阪天王寺區悲田院町二八地

發行者 四阪保治

印刷者 大阪市東區鶴橋南之町一丁目
矢張左馬紀

印刷所 大阪市東區鶴橋南之町一丁目
日本印刷製本株式會社

不許轉載

發行所 大阪市天王寺區悲田院町二八地

日曜世界社

振替大阪一六七四番
電話天王寺九八五番

新刊の日々の霊養・信仰生活の指南車

| | | | | | | | |
|------------------------------|-------------------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| 青スボル 芳ルジョ 勝ン久 久ン著 | 賀川豊彦著 | 賀川豊彦著 | 松澤兼人著 | 松澤兼人著 | 好本督著 | シユ 大野 野寛 一カ 郎著 | 長谷川初音著 |
| 朝ご とに | 神に 跪く その日 その日 の祈り | 神と 歩む 一日 | 日毎 の力 | 日々 の聖 壇 | 十字 架を 盾と して | 教會 の改 變 | 生活 轉向 實話 |
| 四六判 三六六 頁 送料八 十錢 | 四六判 三三〇 頁 送料六 十錢 | 菊半判 三三六 頁 送料四 十錢 | 菊半判 三三六 頁 送料四 十錢 | 四六判 三七〇 頁 送料一 十錢 | 四六判 二五〇 頁 送料八 十錢 | 四六判 一五〇 頁 送料四 十錢 | 四六判 一四〇 頁 送料三 十錢 |
| 大阪天王寺 日曜世界社 振替 大阪 四七六 | | | | | | | |

賀川豊彦・序 黒田四郎著

續 偉人
群像 信仰

四六判 一八〇頁 定價十五錢 四錢

歴史的歡迎をうけた『信仰偉人群像』の筆勢は、十七八世紀より、宗教改革前後、中世紀及それ以前、更に初代教會に展開して、ウエスレー、ペンヤン、フォックス、小西行長、テレジア、カルヴイン、ルーター、フランチェスコ、アウガスチヌス、アタナシウスその他廿六人の諸聖人を挙げ、信仰の本流を息もつがせず遡る。豪傑あり、麗人あり、哲人あり、野人あり、を嗣これ一大史劇の活舞臺、基督教讀書界近來の好書。

偉人
群像 信仰

四六判 一八〇頁 定價十五錢 四錢

世界は幾度か混亂と騒擾の間に滅びようとした。しかしその時々秩序と平和をもたらして、危機を脱せしめたものは、神を信じた偉大な人たちであつた。彼らは人類文化の支柱である。彼らは歴史の指標である。本書は、さうした敬虔な神の勇者二十有餘名の足跡をたづね、そこに我らの生活を見出ししめる實に爽快極まる傳記物語集である。筆致流麗、興味津々としてつきず。蓋し老幼男女凡ての人々に好適の良書である。

大阪天王寺 日曜世界社 振替 大阪 四七六

集語物記傳的範模の信堅養靈

| | | | | | | | |
|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 近藤良薫著 | 錦織久良子著 | 福永津義子著 | 松澤兼人著 | 芹野與太郎著 | 金井爲一郎著 | 栗原久雄著 | 青芳勝久著 |
| ジヨン・ペイトン傳 | 愛の人 石井十次 | 母の面影 | 母性の典型 モニカ | 祈の人 澤山保羅 | ハドソン・テイラー傳 | フリリップス・ブルックス傳 | ジヨン・バンヤン傳 |
| 送定四六判 料價六六二〇 六六二〇 錢錢頁 | 送定四六判 料價四二一四 四二一四 錢錢頁 | 送定四六判 料價四二一〇 四二一〇 錢錢頁 | 送定四六判 料價四二一〇 四二一〇 錢錢頁 | 送定四六判 料價四三三五 四三三五 錢錢頁 | 送定四六判 料價六六二二 六六二二 錢錢頁 | 送定四六判 料價一四一六 一四一六 錢錢頁 | 送定四六判 料價六五三〇 六五三〇 錢錢頁 |
| 阪大替振 社界世曜日 市阪大 兌發 四七六壹 | | | | | | | |

筆隨・歌詩・教説・演講の刊新

| | | | | | | | |
|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 岩橋武夫著 | W ^H マイヤス 黒田四郎筆記教 | 柳原貞次郎著 | 長谷川初音著 | 比屋根安定著 | 錦織久良子著 | 大原三八雄譯 | 齋藤潔著 |
| 講演集 暗室の王者 | 神への飢渴 | 講演短説文 常盤木の宿 | 隨筆 ポロ哲學 | 隨筆 五餅二魚 | 詩と隨筆 靈魂のさゝやき | ロウゼンテイナ 信仰詩集 | 詩集 聲 |
| 送定四六判 料價一三〇〇 一三〇〇 錢圓頁 | 送定四六判 料價八一六〇 八一六〇 錢圓頁 | 送定四六判 料價八一二四 八一二四 錢圓頁 | 送定四六判 料價一四二六 一四二六 錢圓頁 | 送定四六判 料價八七二六 八七二六 錢錢頁 | 送定四六判 料價四一五〇 四一五〇 錢錢頁 | 送定菊橫判 料價四一五六 四一五六 錢錢頁 | 送定四六判 料價八一五〇 八一五〇 錢圓頁 |
| 阪大替振 社界世曜日 市阪大 兌發 四七六壹 | | | | | | | |

◆物讀好的仰信の女少年少◆

| | | | | | | | |
|--|---|---------------------------------|--------------------------------------|---|---|---|---|
| 西 阪 保 治 著 | 堀 内 望 天 譯 シ ヤ ウ ツ ド 著 | 第 四 日 曜 物 語 篇 | 第 三 日 曜 物 語 篇 | 第 一 日 曜 物 語 篇 | 梅 田 安 之 著 | 梅 田 安 之 著 | 梅 田 安 之 著 |
| カ タ カ ナ モ ノ ガ タ リ イ エ ス サ マ | 鬼 が 森 | 麥 一 つ ぶ | ク リ ス マ ス 物 語 | 切 支 丹 光 次 郎 | 信 仰 英 雄 物 語 第 三 篇 | 信 仰 英 雄 物 語 第 二 篇 | 信 仰 英 雄 物 語 第 一 篇 |
| 送 定 料 價 十 五 錢 | 送 定 料 價 二 十 錢 | 送 定 料 價 二 十 錢 | 送 定 料 價 二 十 五 錢 | 送 定 料 價 二 十 錢 | 送 定 料 價 二 十 錢 | 送 定 料 價 二 十 錢 | 送 定 料 價 二 十 錢 |
| 阪 大 替 振 四 七 六 一 | 日 曜 世 界 社 | | | 大 阪 市 天 王 寺 區 八 二 | | | 大 阪 市 田 悲 |



339

814

終

